
僕の過去とみんなの未来と

遠藤 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の過去とみんなの未来と

【Nコード】

N 6 3 4 2 H

【作者名】

遠藤 沙弥

【あらすじ】

僕は高校2年になった。両親が交通事故で亡くなって一人暮らしに。そして、女の子とドタバタした毎日が！？僕の過去の話とみんなのこれからのお話です。

第1話（前書き）

はじめまして！ノインです。初めて小説書きました。めっちゃくちゃなところかあると思いますが、よろしく願いします。

第1話

「ふぁ？」

カーテンの隙間から差し込む光で目が覚めた。
枕元に置いてある携帯を開いて時間を確認する。

「6時か……」

もう、起きて準備しないと学校に間に合わなくなる。
重い体を起して僕は着替え始める。

「とりあえず、朝食とお弁当を作らないと」

机の上に置いてある写真たてを見て、心が少し戸惑う。
しかし、もう平気だ。

「おはよう、父さん、母さん」

僕の名前は都住悠斗^{つすみ ゆうと}。僕の両親は約3ヶ月前に交通事故で亡くなっ
てしまった。

僕を引き取ってくれる身内もおらず、僕はマンションの1室を借り、
高校2年の6月から一人暮らしをしている。

両親が残した財産でなんとか生活しているが、そろそろまずいので
最近バイトを始めた。

バイトは学校で禁止されているが、理由が理由なので特別に許可さ
れている。

朝食を食べ終え、お弁当を持ち学校へ向かった。

僕の通う朱西高校は有力な進学校で、何人もの生徒が有名な大学に合格している。

だから、入るのも大変だった。もともと成績は悪いわけではなかった。たので問題はなかったが。

全校生徒はだいたい350人くらい。

1学年は4クラスで別れていて、特進クラスが1クラス、普通科が2クラス、英語科が1クラスとなっている。

1クラス約30人くらいで、男子と女子の割合は4:6と割と女子の方が多。……それを喜ぶ男子が多いけど。

学校に着き、げた箱で靴をはきかえ、自分の教室に入った。僕は普通科の2年生である。

教室に入るとすでに何人が居て、おしゃべりする人、本を読む人、いろいろいた。

見慣れた姿を見つけたので話しかけに行った。

「おはよう、翼」

「おあ、悠斗か、おはよう」

僕が話しかけたのは上条翼^{かみじょうはな}。

小学校からの友達で、成績優秀＋スポーツ万能おまけにイケメン。人当たりがよく、基本誰とでも仲良しなので人気者である。特に女子から。

本人はあまり嬉しくないらしい。翼も女の子苦手だからな。

「今日は早かったんだな。朝部活……はもうないんだっけ」

「もう僕は卓球部ではないからね。バスケット部は？朝部活だったんでしょ？」

「ああ、朝から体育館5周走らされた、さすがに疲れた……」

「ははっ、お疲れさま」

「お前も朝から大変だろう。毎朝、朝食と弁当作ってから学校登校してくる奴なんてお前くらいじゃないか？」

「そんなことないよ。それに、もう慣れたしね」

「その頑張りを少しは彩音も見習えばいいのにな。そうすれば彼氏の一人くらい……」

「っ！？翼、後ろ……」

「彼氏の一人くらいにかな？翼？」

翼の後ろには般若のような顔をして、今にも拳を振りおろそうとしていた。

「あれ！？彩音！？いや、違うんだ。これはその……」

「何が違うんだ！このバカー！」

あ、拳が振り下ろされた。見事、翼の頭に命中。とつても痛そうだな。拳を振りおろし、翼の頭にたんこぶを作ったのは、桜沢彩音。彩音も小学校から友達で、僕と翼と彩音の3人でよく遊んだ。身長は僕より少し低めで、髪はセミロングくらいにしている。

どちらかといえば、可愛い系。スポーツも得意で男子に人気があるらしい。

「痛いじゃないか！なんてことをするんだ、彩音！」

「うるさい、あんたが勝手なこと言ってるからでしょう！」

「勝手なつて……ホントのことだろう。事実のほうですが」

「弓道部は朝部活があるから、朝は忙しいのよ！」

「そうですか、そうですか。それは大変ですね」

「ちょっと、翼。もういいでしょ」

「そうだな。悠斗がそう言うなら許してやろう」

「なんですって!？」

「まあまあ、彩音も落ち着いて。ほら、先生来るから」

「ホントだ。席に戻ろう」

そう言つて、翼は自分の席に戻って行った。悔しそうな顔をしながら彩音も席に戻って行く。

「あ、彩音」

「な……何？」

「まだ言っ てなかったから、おはよう」

「あ……えと、おはよう」

そこで先生が入ってきたので僕は自分の席に戻った。そして、朝のHRが始まった。

第2話

「みんな、おはよう」

「「おはようございます」」

「いきなりだが、今日は転校生が来ているので紹介する」

転校生って……もう6月も半ばだぞ!?

「先生、しつもん。男子ですか?それとも女子ですか?」

「女子だ。それも6歳の頃からイギリスでに住んでいて、今度から日本に住むことになったらしい。つまり帰国子女というわけだ」

「マジで!?!」「帰国子女なら英語ペラペラ!?!」「可愛いかな!?!」「よっしゃー!?!」

いろいろな人が声を上げてわくわくしている。特に男子。翼は興味なさそうに窓の外を眺めている。
僕も少し眠いし、今のうちに寝ようかな?

「はいはい、静かに!それじゃあ、入ってきて」

「失礼します」

静かに一人の女の子が教室に入ってきた。その姿にみんな声を失ってしまった。

長身で、出るところは出て締まるところは締まって、更に肩まで伸

びた金色の髪の毛のサラサラと流れる質感が、
見惚れてしまうほど大人の魅力を振りまいていた。
黒板に丁寧に自分の名前を書いていく。

「ルイス」C「ソフィアです。一人が好きなのであまり話しかけな
いでください。よろしくお願いします」

それだけ言うと、ぺこ、つと頭を下げた。
彼女の発言にびっくりしてみんな黙ってしまった。いきなりみんな
と仲良くするつもりはありませんと言われればな……。

「ルイスの席は……都住の席の隣だな。ついでに休み時間でいいか
ら、ルイスに学校を案内してやってくれ」

「ええ！？僕がですか！？女子の方がよくないですか！？」

「別に、男子でも女子でも変わらないだろう。じゃあ、ルイス、わ
からないことがあったらあいつに聞いてくれ。

そうだ、ルイスはまだ教科書がないから都住に見せてもらおうように」

「わかりました」

そして、隣の席に座った。

「今日からよろしく」

「……よろしく」

そして、休み時間ごとに校舎を案内していった。案内している間は
会話はなく、ルイスさんは「へえ」とか、「そう」とかしかなわな

かった。

今日の授業も終了し、放課後となった。放課後はルイスさんが「部活を見たい」と言うので案内することに。

翼も彩音も部活でとくにいなくなっていた。

「えっと、ルイスさんはどこの部が見たいんですか？」

「また……都住くん、その「ルイスさん」ってやめてくれない？さん付けはダメ。私も「都住」でいいでしょ」

「え！？そんな突然は無理ですよ。それに今日知り合ったばっかなのに」

「私がいって言うてるの！わかった、都住？」

「わ、わかりました、ルイス」

「うん、よし。じゃあまず、バレー部に案内して」

「わかりました」

こうして、放課後はルイスに部活を案内していた。1日じゃあ回りきれなかったなので、明日もということになった。

校舎を歩き回ったので今日は疲れた。僕は早めにベットに入って寝た。

第3話（前書き）

今回はちょっと短くて、次はちょっと長くなるかも…

第3話

次の日

僕はいつもどおり学校に登校。

いつもの教室に入って、今までと違うのは、ルイスの存在。

自己紹介で「仲良くするつもりはない」宣言したので、教室の空気が少し重い。

ルイスは窓際の席でずっと外を見ていた。机でボーっとしていると翼と彩音が話しかけてきた。

「なあ、悠斗。昨日はどうだった？」

「翼と彩音か。昨日は疲れたよ」

「あんな発言すればな……。それでも校舎を案内した悠斗は偉いよ」

「実はまだ案内が終わってなくて……。部活の案内もしてるんだ」

「そうか、頑張ってくれ。あのルイスに話しかけられるのはお前だけだ」

「別にいいじゃないの。本人がそう言ってるんだから。」

「そうだけど。彩音が言うのもわかるけど、僕はルイスを一人にはしたくないんだ。一人は辛いに決まってるんだ……」

「そうね、悠斗は一人でいる辛さを知ってるから同じ思いをしてほしくないんだよね」

「うん、そうゆうことだよ」

実際、ルイスに僕以外の人が話しかけたのを見ていない。ずっと一人で外をのんびり眺めていた。

それでも僕はルイスに話しかけ続けた。ほとんど、無視されるが。それでも挫けずに話しかけ続けた。

そして、放課後。僕はバイトがあるので、ルイスには「今日は用があるから、案内できない。ごめんなさい」と言って帰った。

バイトがある日は、6時から10時までである。僕は駅近くの焼き肉店のホールスタッフをやっている。

時給850円、まかない有り。週4くらいで働いている。

まだ働き始めて、1ヶ月くらいだけだいぶ慣れてきた。始めたころは失敗ばかりで迷惑をかけてしまった。

今日も10時まで働いた。あまりお客が入らなかったから少し楽しかった。

それでも疲れた。早めにお風呂に入って寝よう。

明日は晴れるかな？

第3話（後書き）

今回はちょっと短くて、次はちょっと長くなるかも…

第4話

ルイスが転校してきて、1週間が経った。ルイスは相変わらず誰とも話さず一人でいた。

本人はそれを望んでいるし、みんなは話しかけようとするが、諦めてしまう。

僕は少しそれが気になってしまった。ルイスは一人で平気なのだろうか？僕に何かできないだろうか？

授業の内容も身に入らず、お昼になってしまった。

少し一人で考えたいので、僕の秘密の場所に向かうことにした。お弁当を持って教室を出る。

僕の秘密の場所、それは屋上だった。普段はカギがかかっているの、誰も屋上に出ることはできない。

だが、僕は一番は時の窓はカギが壊れているので、そこから屋上に出れる。それは僕しか知らない。

「今日はいい天気だな」

空を見上げれば雲一つない、透き通るような蒼い空だった。

お弁当も食べ終え、ボーっとしていた。

あー、難しい事考えないでお昼寝したいなー。

「ホントね」

「え？」

後ろを振り返ると、そこにはルイスが立っていた。

「どうしてここが？」

「あなたが教室から出て行くのを後ろからついてきたのよ。気づかなかった？」

「全然わからなかった……」

「静かね、ここ。教室はうるさいからここにずっといようかしら」

「なんで？ どうして、誰とも話さないの？ 友達を作らないの？」

「他人なんて信用してどうなるの？ どうせ裏切られるだけじゃない。みんな離れて行ってしまえば、はじめからそんな関係ないほうがいいわ」

「けど、一人は心細いよ。みんなといた方が楽しいじゃん！」

「あんたに私の何がわかるの！？ あんただってどうせ離れていくんでしょ！ だったらもう私は一人でいい」

「僕は離れないよ。ルイスの隣に居る」

「なんで？ 同情ならいらないわよ！」

「同情じゃない。ルイスを一人にしたくないだけだよ」

「そこまで言うなら、信用できるのよね。なら、まず10分以内にバレー部からバレーボールを一つ持ってきてなさい」

「なんで、そんな？」

「悠斗が信用できるって証明してほしいのよ。それともできないのかしら？」

「それでルイスは友達を作ってくれるの？」

「いいわよ。友達を作ることを約束するわ」

「わかった。すぐに持ってくる」

僕は走って屋上から出た。そしてまっすぐ体育館へ向かった。体育館では別のクラスが使って、バレーをしていた。先生に気付かれないようにバレーボールを一つ持って走った。

「持ってきた！」

「そう、じゃあ次は私の鞆を持ってきてもらおうかしら。もちろん、10分以内に」

「わかった」

バレーボールを置いて、僕は教室に走り出した。

教室に入ると授業をしていた。先生がびっくりしてこちらを見ている。

「こら、悠斗じゃないか！？どこに行ってたんだ？もう授業は始ってるんだぞ！」

「すみません、事情はあとでいくらでも説明しますので、今は見逃してください！」

「おい!？」

それだけ言うと、僕はルイスの鞆をつかんで廊下に出た。この先生は説教が長いからな……。今日はバイトじゃなくてよかった。余計なことを考えながら走っていたので、思わず転んでしまった。制服が汚れているのも気にせずに屋上へ走った。

「持ってきたよ!」

「それじゃあ、次はグランドの隅に生えてるタンポポを15こ教室に摘んできて」

「教室? 屋上じゃなくて?」

「そうよ、その次で最後だから」

「わかった」

第4話（後書き）

なかなか小説を書くのは難しいですね。

第5話

僕はグラウンドを目指して走った。靴を履き替えるのも忘れて、ひたすらタンポポを探した。

だがなかなか見つからず、草むらに突っこんでは探し続けた。そして、なんとか15このタンポポを見つけた。思ったより時間がかかってしまったので、急いで教室に戻る。

ずっと走ったせいか、膝が震えている。肺も痛くなっていた。けど、ここで諦めるわけにはいかない！

「取ってきた！」

靴は泥だらけになってしまったので、靴は脱ぎ捨てて走った。みんながびっくりしてこちらを見ている。黒板には自習と書いてあった。黒板の前ではルイスが腕を組んで立っていた。僕はルイスの前にタンポポを15こ置いた。

「さあ、次はなに？最後のはずだよね」

「そうね、それじゃあ最後は……」

「ちょっと、悠斗！あんた何してんの？なんでそんなボロボロなのよ！？」

椅子から立ち上がり、彩音が大きな声で僕に言った。答えを待つようにみんなも見ている。

「なんでもないよ、気にしないで」

「そんなわけないでしょ！あんた、手足が泥だらけじゃないの！制服だってボロボロじゃない！？」

「ああ、ごめん。あとで洗うよ」

「そうじゃないでしょ！ルイスがこんなことさせてるのね？ちょっとルイス！どうゆうつもり！？」

「なんでもないわ、彼がやりたいと言うからやってもらってるだけ」

「ふざけないで！あんた、悠斗がどんな気持ちかも知らずに……」

「彩音！僕はいいから」

「でも。それじゃあ悠斗が……」

「僕は大丈夫だから。ありがとう、彩音」

「じゃあ、最後は屋上に出て空の写真を撮ってきて」

「屋上って……今はカギがかかってて出れないはずじゃない！」

「わかった」

「ちょっと悠斗！？」

「大丈夫、いつてきます」

屋上に向かおうと歩き出した時、机に引っかかって派手に転んでしまった。痛い。

「大丈夫！？あんた手、擦りむいてるじゃないの！血出てるわよ！？」

「平気だよ。時間無いから急がないと」

「何で……そこまで……」

彩音が瞳の涙を溜めながら僕に聞く。そんなの、決まってるじゃないか。

「ルイスが一人にならないようにだよ。今度こそいつてきます」

「……っ。頑張れー！悠斗！」

彩音が叫ぶと、みんなも「頑張れー」「いつてこーい」「男を見せたれー」と言って送り出してくれた。彩音は泣いているように見えた。

僕は廊下に出て、一直線に屋上を目指す。途中で、何回か転んでしまった。本格的に足が思いど通りに動かなくなってきた。

やっこの思いで屋上に出ると、僕は携帯を構えて写真を撮った。雲は少しあるがとってもいい天気だ。

時間もあまりないので、すぐに教室に戻る。これで最後なんだ、頑張ってくれ僕の足。

「取ってきた！」

教室に入ると、うおー！とみんなが声を上げた。僕は黒板の前で立っているルイスの元へ歩いて行き、携帯を開いて空の写真を

見せた。

「これで最後なんだよね」

「そうね。最後に質問に答えて。あなたは どうしてここまでするの？途中で止めて、教室に戻っても良かったはず。第一、私が約束を破るかもしれないじゃない。それでも止めずに、ボロボロになってまでどうしてやったの？」

「僕はルイスが約束を簡単に破るような人じゃないと信じた。途中でやめたって、何も変わるわけじゃない。僕がボロボロになるくらい別にいい。それでも、僕はルイスに一人になってもらいたくはない」

「ほっとけばいいじゃない！私はこんなクラスに友達なんていらない。ずっと一人でいいの！」

「ごめん」

「えっ？」

僕はルイスの頬を叩いた。パァンと乾いた音が教室に響く。

「みんなルイスと友達になろうとしてくれてるのに、「こんなクラス」とか言っちゃダメ。確かに裏切られたりはするかもしれない。それでも、クラスのみんなはルイスを受け入れようとしてるの。ルイスはそれを裏切っちゃダメ」

「なによ………なんでよ………」

「みんな、いい人たちだよ。だから……だい……じょうぶ……」

「悠斗!?!」

そこで僕は意識を失ってしまった。ルイスが何か言っていた気がするが、僕には届かなかった。

第6話

目が覚めると、真っ白な天井が目に入った。体を起してみると、こは保健室で僕はベットで寝ていたということがわかった。

少し足が痛い、もう大丈夫だろう。ベットから出て、時計を確認した。

時計の針は午後4時を指していた。そろそろ今日最後の授業が終わる時間だ。

「あら、起きたのね」

保健室の先生が椅子に座って、こちらを見ていた。机には書類が散乱している。

「あ、はい」

「もう大丈夫そう？」

「はい、ありがとうございました」

「クラスの子にもお礼を言っておくのよ。特に君を運んでくれた翼君にね」

「わかりました。それでは」

僕は教室に向かった。まずい、先生に何て言えばいいんだ？

いい訳を考えながら歩いていると、あっという間に教室に着いてしまった。

しょうがない、素直に謝るしかないか。

覚悟を決めて、僕は教室のドアに手をかけた。

「お、悠斗が帰ってきたぞー」

誰かがそう言うと、みんなが拍手をした。周りは「よくやった!」

「お疲れ様!」「ありがとう!」と言っている。

いまいち状況がつかめないままで立っていると、翼と彩音が寄ってきて説明してくれた。

「悠斗!よくやったな。体はもう大丈夫か?」

「あ、翼。保健室まで運んでくれてありがとう。保健室の先生から聞いたよ」

「そんなの気にするな。それより、お前よくルイスを説得したな。みんな感謝してるぞ」

「どうゆうこと?」

「お前が倒れた後、ルイスがみんなの前で謝ったんだよ。」「悪く言っでごめんなさい」ってな。その後、何があっただかも全部話してくれたよ」

「そっか。よかった」

「無茶しすぎよ!ボロボロじゃないの」

「えっと、ごめん」

「べ、別に、怒ってるわけじゃないわよ!ただ、あんまり無茶はし

てほしくないというか、ボロボロのあんたは見たくないというか……」

「うん、ありがとう彩音」

「……うん」

「その後もな、周りのやつと話すようになったんだ。まだぎこちないけどな。それでも大きな一歩だよ」

「そうか、そのルイスは今どこに居るの？」

「お前が来る前に出て行っちゃった。空を見に行くとか言って」

「空を……」

少し考えて、僕はもしかしたらと思って廊下に向かって歩き出した。

「どこか心当たりがあるのか？」

「もしかしたらだけどね。行ってくる」

そうして僕は廊下に出た。クラスみんなは拍手をして送り出してくれた。

もしかしたら、ルイスは秘密の場所に行ったんじゃないのかと思い、屋上を目指した。

「やっぱりここに居たんだ」

「悠斗……」

僕の予想どおり、ルイスは屋上に居た。見上げた空は赤みがかかったオレンジ色に輝いている。

ルイスの頬を見るとまだ少し赤かった。痛かっただろうな。

「ごめんなさい、女の子を叩いたりして」

「いいの、あれは私がいけないことを言ったから。だから謝らないで。」

「でも……」

「それとも、あの時に私が言ったことは間違いじゃなかったの？」

「ううん」

「じゃあ、謝らないで。私が悪いんだから。痛かったけど、怖くなかった。今まで私を本気で怒ってくれる人が居なかったからわからなかったけど、あなたは怖くなかった。むしろあなたにそこまでさせた罪悪感があった。ごめんなさい」

「いいよ、そんなこと気にしないでよ」

「ありがとう、悠斗は優しいんだね。きっといいご両親に育ててもらってるのね」

「……僕の両親はもう居ないよ。3ヶ月前に交通事故で亡くなってるんだ」

「えー!?」、「ごめんなさい。私なんてことを」

「大丈夫だよ。だから僕は一人はだった。本当につらかった、家に帰っても誰もいない。そんなのがもう当たり前になっちゃったからね。だから、ルイスには一人になってもらいたくなくなかったんだ。こんな思いしてもらいたくない。無理やりだったけど、ごめんなさい」

「だから、悠斗はそこまでして…私を？」

「あんな思いは誰もしない方がいいんだよ。クラスの人とは簡単に人を裏切ったりはしない、たとえ誰かが裏切ったとしても、僕はずっとルイスを裏切ったりはしないよ。ルイスを一人にしたりしないから」

そう言つて、ルイスを見るとその場に崩れ落ち、小さく嗚咽をもらしながら泣いていた。

「……ごめん…なさい。私…なんてことを……」

僕はルイスが泣きやむまでずっとルイスの隣にいた。空は夕日から夜へと変わろうとしていた。

第6話（後書き）

もう少し続きます。

第7話

それから3日が経った。

少しずつではあるが、ルイスはクラスに溶け込んでいった。最近のルイスは嬉しそうに笑う。その笑顔を見て、僕も安心する。

実は事件の次の日に、職員室に呼ばれた。おそらく、授業をさばった説教だろうなと思っていたら違った。

先生もルイスがクラスに馴染んでいないこと気にしていたらしく、あれ以来楽しそうにクラスにいるから、特別に許してやると言われた。

ルイスの親から先生に電話があつて「最近あの子、学校が楽しみらしくて嬉しそうにしている。この学校に通わせてよかった」と言っていたらしい。

そのおかげもあつて、僕は先生に褒められた。本当によかった。そして、今日も屋上でのんびりお弁当を食べる。いい天気だ。

「ここに居たんだ」

「ルイス？どうしたの？」

「改めて、お礼を言いたくて。ありがとう、あなたのおかげで友達ができたわ」

「別に僕は大したことでないよ。もともとみんなルイスと友達になろうとしてたから、きっと僕がいなくても大丈夫だったよ」

「そんなことない！あなたが居てくれなかったら、私はずっと意地を張って一人だった……。でも、あなたがボロボロになってまで教えてくれた。こんなに優しい人がいるって、こんなに温かいクラス

だつて。あなたには感謝してもきれないわ」

「おおげさだよ。うちのクラスは温かいけど、イヤな人と平気で仲良く出来るほどの人は居ないよ。だから友達がたくさんできたルイスが凄いいんだよ」

「ありがとう。ぜひお礼がしたいの！今日の放課後空いてる？」

「今日は空いてるけど……お礼なんていいよ」

「それじゃあ私が満足できないのよ！今日、家でパーティがあるから招待するわ」

「パーティ！？いいの？僕が行っても？」

「もちろんよ！パパも悠斗と話したいって言ってたから。もともと今日誘えって言ったのはパパだし」

「そうなんだ。じゃあ断るわけにはいかないね」

「やった！じゃあ放課後ね」

「うん」

そう言うと、笑顔のままルイスは屋上を出て行った。確か、今日はバイトはないし、やらなければならないことはない。帰って、本でも読もうかと思ってただけだから大丈夫だ。そして、あつという間に放課後。

「行くよ、悠斗」

「ちょっと待って」

HR終了とともにルイスが言った。僕はカバンに荷物をまとめる。宿題が多いなー。

「どこに行くのよ?」

すでに帰る準備を整えた、彩音と翼が話しかけてきた。

「私の家だけど?」

「ルイスの家!?」

「おいおい悠斗。いつの間にそんなに仲良しになっただんど?」

「ちょっと悠斗!どうゆうことよ!」

二人が同時に質問してくる。彩音は顔を赤くして、怒ってるようにも見えた。

「ち、違うよ。変な勘違いしないで」

「私が誘ったのよ。今日家でパーティがあるから来てくれないかって」

「パーティ?」

「そう。あなたたちも来る?」

「行く！」

「決断はやっ！二人とも部活はどうするのさ！？」

「今日はお休みだ！」「一日くらい平気よ」

二人同時に言う。二人とも部長候補だろうが。翼はバスケット部で部長を期待されているし、彩音だって弓道部で活躍してるから部長は「彩音だ」って聞く。

「そ、それに、……悠斗がルイスと二人つきりになるかもしれないし……」

「え？ごめん、良く聞こえなかったけど。なんだって、彩音？」

「なんでもない！とにかく私も行くわ！」

「行くなら行くわよ。外に車を用意してあるから」

そして、翼と彩音も行くことになって、四人で校舎を出た。校門から少し歩いたところに車が停めてあった。

それは、黒塗りの高級な車だった。思ってたよりも長いんだ。というか、初めて見た！

「さて、乗るわよ」

「「ええ！？ルイスってお金持ちなの！？」「」」

「そつでもないわよ」

当り前のように車乗ろうとするルイス。びつくりして固まってしまう。僕ら三人。

すると、運転席から誰かが降りてきた。うわぁ！執事だ！リアル執事だよ。

「紹介するわ。執事のアルトよ。アルト、こちら、私の大切な友達よ。右から彩音、翼、そして悠斗よ」

「はじめまして、私はアルトと呼んでいただいて構いません。今日はお越しいただきありがとうございます。屋敷までご案内をさせていただきます」

「「「よ、よろしく願いします」「」「」

第7話（後書き）

作り終えたらどんどん更新したいと思います。

第8話

後ろの扉をアルトさんが丁寧に開けてくれた。緊張しながら中に入ると、中も負けじと豪華になっていた。すごいとしか言いようがありません。

そして、アルトさんの丁寧な運転で10分後、屋敷に着いた。ルイスの後に着いて行くと中は開放的になっており、とても広かった。パーティなので、それなりの格好に着替えることになった。男子と女子に別れて、メイドさんに案内される。すでに準備された一着のスーツと共に更衣室に入れられた。あんまりスーツは似合わないと思うけどなー。

着替え終え、翼と会場に向かった。扉を開けて中に入ると、これから結婚式でもやるんですか？と思うほどの人と料理が用意されていた。

「すごいな……」

「そうだね、翼」

「あ、いたいた。遅いよー、二人とも」

振り返るとドレス姿の彩音とルイスがいた。

「うわぁー、二人ともドレス似合ってるね」

「そ、そうかしら。悠斗達だってスーツ似合ってるよ」

「そうかな、でもありがとう」

「それじゃあ、悠斗。パパのところに行きましようか。二人はここで楽しんでください」

「え、ちよつと何それ！」

「まあ、いいじゃないか。ほら彩音、お前の好きな肉があるぞ。あつち行こうな」

「翼、はなして！こらー」

翼に腕をとられて彩音が連れていかれた。翼が振り返って僕に親指をぐつと立てた。なんだろう。

「こつち。行くよ」

そう言うと、ルイスが僕の腕にぴったりとくっついてきた。びっくりしてルイスの顔を見ると赤くなっていた。

「ちよ、ちよつとルイス！？歩きずら行つて」

「こ、こつちのものよ。パーティではこれが当たり前なの！」

そう言われて周りを見ると、確かに腕を組んだ男女がちらほら見える。でも、僕たちはただの友達だぞ。

「いいから、早く行くわよ！」

「うわあ、引つ張らないでよ。わかったから」

ルイスに引つ張られる感じで、会場から出た。そして、別の部屋の

扉の前まで来た。ルイスがノックをしてから入る。

「パパ？ルイスよ。悠斗を連れてきたわ」

「入りなさい」

扉を開けて中に入ると、見た目は20代後半くらいに見える、若くてかっこいい男性がいた。身長も180センチくらいあるだろうか？僕より全然大きい。

「君が都住悠斗君だね。はじめまして、私はルイスの父親の、ユリウス〃C〃ソフィアだ。娘がお世話になったようだね」

「そんなことないです。ルイスには僕の方が迷惑をかけているくらいです」

「ははっ、とてもしっかりしているね。ルイスからいろいろ話は聞いているよ。娘がわがまま言っただけで迷惑をかけたみたいで。その時はすまなかった」

「とんでもないです！頭を上げてください。その時のルイスの気持ちは自分もわかりますし、あれはしょうがなかったと思います」

「それでも君は娘をなんとかしてくれた。ホントは親である私の仕事なのにね。君には一生をかけても返せない借りを作ってしまった。本当にありがとう」

「いえ、あの…どういたしまして…」

「今日来てもらったのはほかでもない、お礼がしたかったからさ。」

聞くところによると、君は今一人暮らしらしいじゃないか。ほとん
どを自分でやっているみたいだね」

「はい。そうです」

「家に来るといふのはどうだろう？君一人ならずとも養ってい
ける。お金の心配はしなくてもいい、広い一人部屋も用意しよう、
食事毎日豪華なものを約束しよう。ルイスはどうだ？悠斗君が家
来るのは反対か？」

「うっん、悠斗が来てくれるなら私は賛成だよ」

「娘もああ言ってる。悠斗君はどうだい？」

「……」

「すぐにではなくていいよ。パーティが終わるころにもう一度聞く
からその時にでも……」

「待って下さい。答えは出ました」

「早いね。それでどうだい？」

「大変魅力的なお誘いですが、お断りさせてもらおうと思います。
勝手にすいません」

「……そうか、残念だ。できれば理由を教えてくれるかい？」

「……僕には豪華な生活よりも庶民的な生活の方が合っています。そ
れに、すべてを頼って生きていくのは自分で許せませんから」

「ははっ、わかった。だが、君ならいつでも来てくれても構わないよ。話は変わるが……少し、二人きりで話したいからルイスは席をはずしなさい。盗み聞きはダメだぞ」

「わかってるわよ。じゃあ後で来てよ、悠斗」

「わかった」

それだけ言い残すと、ルイスは部屋から出て行った。残ったのは僕とルイスのお父さんだけ。するとユリウスさんが語り始める。

「昔のルイスは……本当に誰とも話をしようとしなかった。親の私でさえも、無視されることが多かったんだ。だが最近になっての……君が頑張ってくれてからのルイスは家でも楽しそうに話してくれるようになった。まあ、大体が君のことなんだけどな」

「ええ！？ルイスは何を話しているんですか？」

「初めて話したのは、今日、ある人にとっても迷惑をかけた。怪我もさせてしまった。それでも私の為に怒ってくれた。私の間違いを正してくれた。嬉しかった」だったな。私もびくりしたよ。突然、泣きながら話しかけてきたからね。それからは毎日嬉しそうに教えてくれる。あんな娘の嬉しそうな顔を久しぶりに見たよ」

「そうですか。よかったです。ルイスが元気になってくれたみたいで」

「君は本当にすごいな。私の親としての立場が台無しだ。ホントに君には感謝している。そして、これからも娘をよろしく頼む」

「わかりました。僕に何ができるかわかりませんが、精一杯頑張ろうと思います」

「時に、君は彼女はいるのかな？」

「か、彼女ですか？いるわけないですよ」

「ふむ、そうか。ありがとう。では、娘のところへ行ってあげてくれ」

「はい、失礼します」

第8話（後書き）

サボってすいません・・・。
今回は少し長めになりました。

第9話

なぜそんなことを聞いたんだろうと？とわからないまま部屋をあとにし、会場に戻った。翼と彩音とルイスは三人で料理を食べながらおしゃべりしていた。少し彩音が不機嫌そうなのは気のせいだろうか。少し疲れたので、外に出て涼しもうと僕は外に出た。ひんやりとした風が気持ちいい。

「ここに居たんだ。探しちゃった」

「ルイス。どうしたの？」

「悠斗に話したいことがあって……今、大丈夫？」

「いいよ。なに？」

「まずはお礼。私は悠斗のおかげで変わった。明るく生きることができた。クラスで友達ができた。本当にありがとう」

「どういたしまして。でも、僕はきつかけを作っただけで大したことはしてないよ。僕じゃなくても誰でもできたことだもん」

「それでも悠斗は変えてくれた。悠斗が変えてくれたのがうれしかったの」

「それは僕も動いてよかったかな。つまらない毎日より楽しい毎日の方がいいもんね」

「あと……」

「ん？」

「……私…悠斗のことが好き…。とても優しくて、私の為に本気で叱ってくれた悠斗が好きになったの。だから…私と付き合っ下さい！」

「ええ！？ぼ、僕！？でも…」

「悠斗は私にいろいろ教えてくれた。それはとても大切なこと。だから悠斗にもつと教えてもらいたい！悠斗のそばに居たいの！」

顔を真っ赤にしながらルイスが言った。ルイスはそこで僕の手を取り、そして強い意志を湛えた目で、僕を見据えていた。取った手は少し震えていた。

「……」

「ありがとう。ルイスの気持ちはとてもうれしい」

「なら！」

「でも、僕はまだルイスへの気持ちはハッキリとわからないんだ。ルイスが真剣に言ってくれたから、僕の気持ちもハッキリさせないと真剣に言ってくれたルイスに失礼だから…考えさせてほしい」

「……わかったわ。なら、答えがハッキリしたら教えて。いつまでも待つてるから。それまで私はアプローチを続けるからね！」

「ごめん。いけないことだと思うけど……」

「悠斗、目つぶって」

「え？いいけど」

僕は言われたとつりに目をつぶる。そしてそのあと……

「ちゅっ」

一瞬何が起こったかわからなかった。目を開けると、すぐ近くにルイスの顔が近くにある。ルイスがほっぺにキスしたきたというのがわかった。

「えへへ。唇は悠斗からしてくれるのを待ってるわ。じゃあねっ」

「え、いや、あの、その……」

それだけ言って、ルイスは会場に戻って行ってしまった。僕は心臓をドキドキさせながら、ただ立ち尽くしていた。

第9話（後書き）

次は新キャラを登場させたいと思います。

第10話（前書き）

とうとう10話になりました。見てくださってる方、ありがとうございます。これからも頑張って更新していきたいと思っています。

第10話

「今日の授業はこれまでだ。テストも近いからしっかり勉強をしておくように」

やっと授業が終わった…。昨日のバイトはお客さんがたくさん来たため、帰るのが遅くなり寝る時間があまりなかった。ちなみに今は放課後です。

「悠斗、ちよつといい？」

「何？どうしたの、ルイス？」

「数学の西山先生って今はどこにいるかわかる？」

「西山先生は卓球部の顧問だから今は卓球部のところに居ると思うよ」

「そつか。じゃあ一緒に付いてきてくれない？卓球部の場所がよくわからない」

「ええ！？卓球部かあ…。……わかつたいいよ」

「?? ほら、行こ」

ルイスが廊下へと歩いて行く。そして、僕もそれにつづいて廊下へと。実はあまり行く気はしなかったりする…。とつと案内して帰ればいいか。

ルイスと一緒に第二体育館へ。ちなみに第一体育館は主にバスケット

やバレー部が使っていて、第二体育館は卓球部や体操部が使っている。扉を開けると、カコーンと懐かしい音が聞こえてくる。ここに来るのも久しぶりになる。

「失礼しまーす。西山先生居ますかー？」

「「悠斗（先輩）！？」「」

「おおー！びっくりした。どうしたのみんな？」

「都住先輩ーーーー！」

「うわ！」

いきなり誰かが抱きついてきて、僕は後ろに転んでしまった。結果的に僕が押し倒された感じになった。見ると、僕よりも小柄でポニーテールにされた髪が揺れていた。…ってことは。

「こら桐原さん！危ないじゃんか！ほら、離れて」

「どうしたんですか先輩！？もしかして、卓球部に戻ってきてくれるんですか！？」

「違うよ。今日は付きそいできただけ、西山先生居る？」

「今は職員室に行ってます。すぐ戻ってくるって言っていましたよ」

「だって、どうするルイ…ス？」

「そう。じゃあ待たせてもらおうかな」

「なんか怒ってない？」

「全然！！あんたもいつまでそうやってんのよ！」

「うわあ、ほ、ほら桐原さん離れて」

「あゝ、もう少し〜」

「だいたいあんたはなんなのよ！いきなり悠斗に抱きついて！」

「そちらこそ誰ですか？私が都住先輩に抱きつこうと勝手じゃないですか」

「なんですって！」

「ああ、ごめん。この子は一年生の桐原七海^{きりはら ななみ}さん。桐原さん、こちら最近うちのクラス転校してきたルイス」

「はじめまして、ルイス先輩。都住先輩、今日暇なら練習見て下さいよ〜」

「ええ、けど、ルイスもいるし……」

「別に先生もまだ来てないんだし、やっててもいいわよ。悠斗が卓球してるところ見てみたいし」

「そう？ルイスがそう言うなら、いいか。少しだけだよ」

「やった！みんなー、都住先輩が練習見てくれるってー」

そうしてみんな集まってくる。久々だし、少しくらいやつてもいいか。そうしてみんなが練習しているところを見ていく。注意するところがあれば注意する。そして、最後に僕も混じり１１点先取で試合が行われた。動き方も体が覚えていたのでなんとか勝てた。

「よし、今日はここまでー」

「西山先生！？居たんですか？」

「ついさっきだな。それにしても都住、相変わらず強いな。卓球はもうやらないのか？お前なら県大会まで進めるかもしれないのに」

「すみません。バイトがあるので、部活をする時間はあんまり……」

「…そうだったな。だが、時々でいい。たまに部に顔を出してくれないか？部員たちもお前がいる方が張り切ってくれる。何より私も最近は大忙しでね。できたら君に代わりに指導してもらいたいんだ」

「そんなことないです！でも僕に指導なんてできないですよ」

「そうかもしれないが。本当にたまに練習しているかどうか見てくれるだけでも構わない。どうだ？」

「本当にたまにしか来れないですよ。それでもいいなら大丈夫ですけど…」

「それでもいい。みんないいか！これからたまにだが、都住が代わりに指導してくれる！それで頑張るよーに！」

「「はい！」」

「それじゃあ、絶対に来て下さいよ！都住先輩は教え方がうまいんですから」

「それは言いすぎ、桐原さん。みんなの上達が早いからだよ」

「そんなことないです！都住先輩のおかげで私はこうして卓球を続けられるんだから……」

「桐原さん、もうそれは言わないの。それじゃ帰ります。お疲れ様でした」

そう言っただけはルイスの元へ行こうと思っただけでルイスは居なかった。周りの人に聞いてみると、とっくに帰ったと言われた。

第11話

そうして、僕がバイトのない日は卓球部に顔を出しみんなの練習を見た。と言っても僕はバイトを週五で入れてあるため、頻繁に行けるわけではないが…。それでも任されたんだし、行ける日は毎日行った。今日もバイトがないし行こうかと思っていると翼がやってきた。

「悠斗、そろそろテストだし、卓球部は出なくていいんじゃないかな？」

「そうか、もうテストか…。ってことは部活はないじゃん」

「そうゆうこと。俺の家と一緒に勉強しないか？教えてやってもいいし。その代り……」

「はいはい。夕食は僕が作ればいいんですよ。でも教えてもらわないとまずいかもれないからお願いしようかな」

「よし！じゃあ行くか。悠斗が作る飯はうまいからな。今日はチャーハン作ってくれよ。材料は家にあるやつ使っていいから」

「いいよ。じゃあ行こ」

「「ちょっと待った！」」

誰かに呼びかけられて振り返るとルイスと彩音の二人が帰る準備万端の状態で立っていた。とても真剣な目をしてらっしゃる。

「「^{あたし}私も行くわ！」」

「？ 別に俺はいいけど。悠斗は？」

「僕も別にいいよ。けど、ルイスは勉強できるんじゃないの？」

「まあね。だから、私が悠斗に勉強を教えてあげてもいいわよ」

「ちょっと、ルイス！あ、あたしが悠斗に教えるわよ！」

「彩音は僕より出来るわけじゃないでしょ…。あ、でも、夕食の準備は誰かに手伝ってもらいたいかも。いつもは二人分だけど今日は四人だから少し大変かもしれないし」

「「^{あたし}私が手伝うわ！」」

「え？…え？」

「ははっ、モテモテだな悠斗」

「??？」

翼が言うことがよくわからない。だいたい、僕がモテるわけがないのに。ルイスと彩音は隣でぎゃあ、ぎゃあ騒いでいた。騒がしいまま翼の家まで移動した。家の人は誰もいないのか、とても静かだった。

「さて、始めるか。いつもどおり、わからないところがあったら言ってくれ」

「わかった。夕食は七時くらいでいい?」

「「「いいよ」」」

「じゃあ、始めよう」

みんなが教科書とノートを開いて勉強を始めた。さて、僕は数学でもやろうかな。いつもバイトだからここで少しは挽回しておかないと。そう思い、教科書とノートを開く。

「うーん、ここはどうやればいいんだ?」

「どこがわからないの?」

そう言つて、ルイスがすぐ隣まで寄つて来る。うわあ、すぐ隣にルイスの顔がある。

「え…と、ここなんだけど…」

「そこはこの公式を当てはめて計算すればいいわ。…顔が赤いけど、大丈夫?」

「ああ!こ、この公式ね。ありがとう」

「ちょっとルイス!近づき過ぎじゃない!?悠斗もデレデレするな
ー!」

「あら、そうなの?私は悠斗なら別にいいわよ」

「こらー!ルイスも変なこと言つなー!悠斗はそろそろ夕食の準備

しなさいよ!」

「も、もうそんな時間?...うわ、ホントだ。じゃあ準備してくる。翼、手伝ってよ」

「「だから私^{あたし}が!」」

「食器の位置とかは翼がよくわかってるでしょ。すぐにできるから待ってて。行こう、翼」

「わかった」

そうして、僕は翼と台所に向かった。今日は何にしようかな。そういえば、翼以外の人に僕の料理を作るのは初めてだな...

その頃、翼の部屋に置いて行かれた二人はというと、いろいろなことを話し合っていた。主に悠斗のことを。

「悠斗が作った料理か。そういえば、彩音は料理とかするの?」

「.....そういうルイスはどうなのよ」

「その反応はできないのね...。私もできないけど。男の人に料理してもらうのは、女として少し複雑ね。彩音は悠斗の料理は食べたことあるの?」

「ないわ。食べたことあるのは翼くらいじゃないかしら?」

「それじゃあ、楽しみね」

「そうね」

二人とも楽しみに夕食の時間を待った。そして、二人とも悠斗に料理を教えてもらおうと考えたのであった。

第12話

「うまいー！」「」

「よかったー」

チャーハンというリクエストだったが、作るには材料が足りなかったので結局夕食はカレーになった。カレーは何回も自分で作ったことがあったので、問題なく出来た。

「普通にお店で売っていいレベルよ。これならあたし800円は出せるわ」

「そうね、家のシェフにも負けてないわよ。悠斗は料理うまいのね」

「おおげさだよ。料理は毎日してるからこれくらい普通だよ」

「いや、お前の料理はホントにうまいぞ。今日はえらく張り切ってたな」

「だって、翼以外に今まで作ったことなかったから……。大丈夫かなーって思ってた頑張りました」

「大丈夫！すごくおいしいわ。毎日作ってもらいたいくらい」

「私も。悠斗を専属のシェフにしたいくらいよ」

「あはは、ありがとう。よかった」

夕食も食べ終わり、再び翼の部屋に戻った。そして、椅子に座っていた翼がこっちを向いて突然喋り始めた。

「しかし、悠斗に彼女ができたならその彼女は幸せだなー。こんなおいしいご飯が毎日食べられるんだし。でも、悠斗も彼女は料理ができたほうがいいよな？」

「「!？」」

「僕はどっちでもいいかな。できないなら僕がカバーできるし」

「でもできたほうが嬉しいだろう。彼女の手料理は食べてみたいと思わない？バレンタインにチョコとかさ」

「ああー、チョコは嬉しいかも。お菓子とか好きだから嬉しいね」

「「(クッキーすら作れないかも...)」」

「お、そろそろ帰ったほうがよくないか？もうこんな時間だぞ」

「私は車を呼ぶからいいわ。悠斗、ご飯ごちそうさま。それじゃあ、また明日」

そういうと、ルイスは荷物をまとめて早々帰ってしまった。まあ、僕も帰るか。

「んじゃあ、悠斗は彩音を家の近くまで送って行けよ。夜道を女の子が一人じゃ危ないだろう」

「そうだね。それじゃあ、帰ろうか彩音」

「う、うん」

なんだろう、翼がこっちを見ながらいい笑顔で親指を立ててグツとしてる。それを見て、彩音をそれを返してる。…僕は見なかったことにしよう。

彩音の家は僕のマンションからそんなに離れてはいない。彩音の親とも面識があつてよくご飯をごちそうになったりしていた。そういえば、最近会ってないな。

「ねえ、今度クッキーの作り方教えてくれない？」

「いいけど、彩音って料理できるの？」

「それとは関係ないの！あたしだってその気になればクッキーくらい作れるんだから…」

「わかった。テストが終われば夏休みだからね。その時に教えるよ。誰かにあげるの？」

「そ、そんなの、……にきまってるじゃない……」

「え？よく聞こえなかったけど…。でも、食べてみたいな。彩音が作ったクッキー」

「ホント！！ホントに食べてみたい！？」

「う、うん」

「そっか……じゃあ頑張らないと。あ、ここでいいわ。また、明日ね！」

「あ、うん。また明日」

そう言って手を振りながら別れた。さて、もうすぐテストがあつて、それが終わると夏休みか……。今年の夏休みは……バイトかな……。遊べるなら遊びたいよね。

第13話

「はい、そこまで。シャーペン置いて、一番後ろの席の人は答案用紙集めて」

「終わったー」

翼が両手を伸ばしながら言葉をこぼす。最後のテストが終わったところだ。これで明日にはテストが返ってきて、それが終わると夏休みとなる。

「悠斗ー、今回のテストどうだった？」

「大丈夫だと思う。翼が教えてくれたおかげでね」

「ははっ、まあな。夏休みだけど、お前はどっするの？俺は部活がたまにある程度であとは暇なんだけど」

「そうだね…。短期のバイトでも探してみようかな。ここで稼げるだけ稼いでおきたい」

「そっか。しかし、一度しかない高二の夏休みをずっとバイトで過ごすというのはつまらなくないか？海に行くとか、山に行くとか、とりあえずどっか行こうぜ！」

「それもそうなんだけど…。いざ、行くとしてどうやっていくの？」

「うぐ…、それはだな……。」

「ふう。どうしようかな」

「話は聞かせてもらったわ!」

「お、ルイス。なにに、なんかいい案あるの?」

「もちろん! 私の家のプライベートビーチに一泊二日で行くのはどうかしら? 送り迎えもこちらで手配するわ」

「ええ!? いいの?」

「もちろん。パパに言えばいいだけだし、それに悠斗の頼みだって言えば喜んでOKしてくれるわ」

「おお、やるなー悠斗。さすがだぜ」

「でも、ホントにいいの? 突然で困るんじゃない?」

「そんなことはないわ。悠斗には借りがあるから困ったことがあつたらなんでも言いなさい、って言われてるし」

「わかった。じゃあ、お願いしようかな」

「OK。今からパパに連絡するわ」

そう言つてルイスは自分の携帯電話をいじり、電話し始めた。しかし、ルイスの家はプライベートビーチまであるのか…。どんだけのお金持ちなんだ…。そんなことを考えていると、ルイスから携帯電話を手渡される。

「パパが悠斗と代わりなさいって」

「もしもし？」

『もしもし、悠斗くんか。話は娘から聞いたよ』

「すいません、突然で」

『はっはっは、かまわないさ。君の頼みは断れないからね。とりあえず、参加する人数を決めて後で教えてもらいたい。もちろん何人でもかまわないよ』

「わかりました」

『それじゃあ、君には娘を任せたよ。それじゃあ』

「はい、ありがとうございます」

それだけ話して通話が終了した。僕はルイスに携帯電話を返す。

「参加する人を決めて、後で教えろって。とりあえず、参加する人は、ルイス、翼、僕…」

「はいはい。私も行きまーす」「あ、私もです」

「彩音、七海さん…っていつの間に!？」

「あたしはさっきから居たわよ」「私は先輩と部活に行こうと思って、さっき来ました!」

「…どうしようか、ルイス？」

「……しょうがないわね。じゃあこの五人で決定ね」

「わーい、私、水着買いに行かないと。都住先輩、一緒に水着買いに行きましょうよ！」

「ちょっと！ 何言ってるのよ。それは私と一緒に行くのよ」

「こらー！ そんなのダメに決まってるでしょ！」

「……えつと？」

三人でにらみ合い、ぎゃあ、ぎゃあ、騒いでいる。それを見て、翼はおなかを抱えて笑っていた。…笑い事じゃないよ。

第14話

「行くぞ、悠斗」

「うん、今行くよ」

今僕がいるのは駅近くの大きなデパートだ。もちろん、海に行くための水着を買うために来たのである。僕周りには海に行く五人が集まっていた。あの後、結局みんなで行くことで丸くおさまった。みんな仲良くすればいいのに。

エスカレーターで二階に上がって行く。すると、すぐに水着が見える。この季節になると、二階の売り場のだいたいが水着でいっぱいになる。ほとんど女性用の水着なので、僕は行きずらいのだが翼はなんか平気そうだ。

「とりあえず、男子と女子別行動だな。そっち終わったらメールして。行くぞ、悠斗」

「ええ！別行動なんですかー。都住先輩も水着選び手伝ってくださいよー」

「そ、それは自分でしてください。行く、翼」

「あうー、ケチ」

可愛らしく頬を膨らませる七海をほっというて、僕は翼と男性用の水着売り場に歩いて行く。売り場に着くと、そこには色とりどりの水着がいろいろあった。あんまり派手なやつはやだから、この真っ黒

のシンプルなやつにしとくか。

「悠斗ー、決まったー？」

「うん、翼は？」

「俺はこれでいいわ。お前はシンプルだな」

「翼は派手だよ…」

翼の選んだ水着は、暗い青をベースとして、ハイビスカスの絵が書かれたやつだった。

「さて、女チームは終わって…るわけないか」

「こうゆうの長そうだからね…、本屋でも行ってる？」

「そうするか」

そうして、水着を買ったあと僕と翼は本屋で立ち読みをすることに。その前に、なんか新しいやつ出たりしてないか確認に行こうと思い、僕は新刊コーナーへ足を運んだ。

「えーっと、新刊はないか」

それだけ確認して、僕は雑誌のコーナーに行こうと思ったとき、ポケットの中の携帯が震えた。開いてみると、七海さんからのメールだった。

「なんだろう？」

『こんな水着はどうですか？』

「！！！」

メールに添付の画像があつたので見てみると、そこには白いビキニを着た七海さんが写っていた。七海さんの体は出るところは出て、締まるところは締まっているので破壊力抜群だ。…思わず僕は携帯を閉じてしまった。

「（これ、なんて返信すればいいんだ…）」

僕は雑誌コーナーの真ん中で、携帯を持ったまま固まってしまった。考えた末に『似合ってるよ』とだけ返信した。

女子の水着選びが終わったのはたつぷり1時間以上経ってからだった。今は五人集まって、デパートの中にあるファミレスでお昼を食べている。

「遅い、こっちは1時間以上待ってたんだぞ。なんでこつも長いかな…。なあ、悠斗もなんか言っちゃれ。ってお前なんか顔赤くないか？」

「え？　そ、そんなことないよ」

「先輩ー、私の水着姿どうでした？」

「「「は？」「」」」

「ええーつと、とっても似合ってたよ」

「ホントですかー。嬉しいです。当日はあれ着ていくんで、楽しみにしててください」

「そ、そう」

「ちょっと！ どうゆうことよ！」 「い、いつの間に見せたのよ」

「どうしたんですか二人とも。私は自分で写メって都住先輩に見てもらったですよー。ほらコレ」

「いつの間に…。さっき悠斗が顔赤かったのはこれのせいじゃないわよね」

「ち、違います」

「違うんですか…」

「あ、いや、七海さんはとても似合ってたよ。だから、その、えーつと…」

「あんたはデレデレすんな！ だいたい桐原さんは恥ずかしくないの!？」

「私は別に都住先輩になら大丈夫ですよ。むしろ、褒めてもらえたいんで嬉しいです」

「 「……………」 」

七海さんの意外な言葉にルイスと彩音は黙ってしまった。七海さんは言う時は、はっきり言うから時々戸惑ってしまう。

「ははっ、悠斗も罪な男だな。桐原さん、悠斗が卓球部に居た時は悠斗はどんな感じだった？」

「都住先輩は後輩の面倒見がよかったし、三年の先輩とも仲が良かったですから人気者でしたよ。卓球もトップの実力なのでみんなの憧れでした」

「そ、それは買いかぶりすぎだよ。僕は楽しく卓球がしたかっただけで…。それに途中で辞めちゃったしね」

「みんな戻ってきてほしいって言っていましたよ。戻ってきたらすぐに部長にしようってみんな言ってます」

「部長なんて無理だよ！途中で部を辞めたやつが部長でいいわけないよ」

「それだけみんなが都住先輩を信用してるんですよ。事情はみんなも知ってるし、先生も認めてました」

「すごいな、お前。卓球部に戻ればすぐに部長昇格だぞ」

「……………」

「さて、食べ終わったんだし行くわよ！」

「まだ先輩と話が終わってないんですけど。ルイス先輩は大人しくしててください」

「いいの！ ほら、まだ買わなきゃいけないものがあるんだからね」

「そ、そうね。行くわよ」

「ルイス先輩も桜沢先輩も強引です…」

ルイスと彩音のせいで半ば強引にファミレスを出た。そして、五人で海に持つて行くのに必要なものを買うに行くことに。といっても、ほとんどをルイスの家が用意してくれるのであまり買うものはなかった。あるとすれば、ゴーグルとか日焼け止めを買う程度だった。

第15話

「それじゃ、これで解散な。えーっと、ルイスは車だからいいな。もう外も暗いし、俺は彩音を送って行くから、桐原さんは悠斗に任せるからちゃんと送ってけよ」

「わかった」

外に出ると、周りはまだ暗くなっていて、携帯で時間を確認すると六時になっていた。…ルイスと彩音が少し睨んでるのは気のせいだろうか。

「悠斗は送り狼にならないようにな」

「私は都住先輩に襲われてしまっんですか？」

「「ちよつと悠斗！ そんなことしたら許さないんだからね！」「」

「そんなことしません！ ほら、七海さん行くよ」

「はい、お願いします」

「それじゃあなー。海は一週間後だからな」

「了解。ばいばーい」

そう言っつて、僕は七海さんと並んで帰ることに。しかし、何を話したらいいのかわからずお互いずっと無言で歩いて行っつた。街灯は明るく、優しく、道を照らしてくれている。すると七海さんが突然立

ち止まった。

「あの、先輩？　ちょっといいですか？」

「ん、なに」

「もう先輩は卓球部には戻らないんですか？」

「そうだね…。バイトがあるから厳しいかな」

「だったら、私が先輩の代わりにバイトします。バイト代は先輩に渡して構いませんから、だから卓球部に戻ってきてください」

「気持ちは嬉しいけど、そんなのダメだ。七海さんのバイト代を使うことなんてできないよ」

「私は！　もう一度、先輩と卓球がしたいんです！　先輩が私を助けてくれたんだから…。だから今度は私が先輩の助けになりたいんです……」

「七海さん……」

「あんなに卓球が好きだったじゃないですか！　そう、教えてくれたじゃないですか！　だから…だからあ……」

「……あ」

「わ、私は、もっと先輩に卓球を教えてほしいんです！　もっと先輩と一緒に居たいんです！」

七海さんは、体を何かに脅えるように細かく震わせていた。そしてしゃくりあげながら、頬を滑り落ちる涙も気にせずにはやべり続けた。

「…ありがとう。でも僕は七海さんからバイト代を貰ってまで卓球はできない」

「で…でも…」

「けど、バイトしながらでも卓球は出来るかもしれない。…みんなの迷惑になるかもしれないけどね」

「そ、そんな事ないです。でも、大変じゃないですか、バイトしながら部活って…」

「後輩の子にここまで言われたら、多少はなんとかするよ。今度、西山先生に相談してみる」

「ホントに！ ホントですか！」

「ホントだよ。だからもう泣かないで。…泣かせたみたいでごめenne」

「いいんです。じゃあ、私の気持ちわかってくれましたか？」

「うん。また卓球教えてあげるよ」

「……………それだけですか」

「うん」

七海さんが「はぁー」と深いため息をついた。あれ？　なんでだろっ、間違っと思ってたんだけど。

「どうしたの？」

「なんでもないです…。卓球部に戻ってきてくれるなら、まずはそれでいいです。あとはまたの機会にしますから……」

「？」

「あの、先輩は今、彼女はいますか？」

「い、いないよ。誰も僕を選んだりなんてしないよ」

「そんなことないですよ。卓球部の一年生の間でも先輩は人気なんです。ただ、いつも先輩のそばにルイス先輩と彩音先輩がいるから……」

「ルイスは隣の席だからね。彩音だって幼馴染だからよく一緒に居るけど」

「…先輩がここまで鈍感だったなんて……」

「え？」

「なんでもないです」

なんか七海さんが呆れた視線を投げかけて、歩きだす。僕は、「なんだろっ？」と首を傾げながらそれに続いて歩いて行く。

「ここでもいいです。それじゃ先輩、ありがとうございます」

「うん。じゃあ、おやすみ」

「はい。夏休み終わったら、一緒に部活行きましょうね」

「うん」

「おやすみなさい」

小さく手を振って、七海さんは歩いて行った。それにしても、部活とバイトの両立か……。やるといった手前、今さらできませんなんて言えないから頑張らないと。

第15話（後書き）

感想など、コメントいただけたら嬉しいです！

第16話

「海だーーーーー！」

五人を乗せた車の窓の横には、綺麗な砂浜、青く透き通った海が広がっていた。

「とりえず、荷物を置かないといけないからコテージに行くわよ。海から少し離れた場所だけど、広いし、とてもキレイなの」

「じゃあ、着いたらすぐに水着に着替えて海に行こうぜ！」

「……賛成！」

そして、砂浜から少し離れた所に車は進んでいった。

「……わあ……」

車から降りた僕は、思わずそんな声を漏らした。木々がまばらに並ぶ林の中、粒々になった太陽の光を浴びて立つ真っ白なコテージ。その後ろ、林の切れ目からは海が見える。

「めっちゃくちゃキレイだし、大きいな」

「キレイなコテージですね！ これ、ルイス先輩の家の所有物なんですか？」

「そうね。けど、たまにしか使わないんだけどね。えっと、部屋は二階が女子で、男子は一階の部屋を使つて。あと、私の専属のメイ

ドが中に一人だけ居るからわからなくなったら彼女に聞いて」

ルイスは自分の荷物を持って、コテージに入って行った。あとを僕たちがついて行くと中に一人のメイドさんが居た。

「はじめまして、私はルイスお嬢様の専属メイドをしております、
さくひなつき佐倉夏希と申します。なにかございましたら、私に申し付け下さい」

「……は、はい」「」

「では、お部屋を案内しますので、都住様と上条様はこちらへ」

案内された部屋はとてもキレイで、日当たりのよい部屋だった。まるで、どこかの高級ホテル部屋みたいだった。

「なにかございましたらこちらのベルでお呼び下さい。些細なことでも構いません」

「わかりました。……あの、佐倉さん？」

「为什么呢？ 都住様」

「もしかして、体の調子が良くないんですか？ とても、疲れたように見えますけど」

「……いえ、そんなことはありません。では、失礼いたします」

佐倉さんはぺこりと頭を下げた部屋を出て行った。隣で、翼が不思議そうに顔を僕に聞く。

「どうした？ あの人そんなに調子悪そうに見えたか？」

「うん……。そんな感じに見えた」

「気にし過ぎだろ。ほら、着替えて海行くぞ！」

「あ、ちよっと待ってよー」

とつくに着替えた翼が部屋を出て行く。僕もそれに続くように部屋を後にした。

「よつと…、こんなもんか。悠斗、下に荷物置いていいぞ」

「わかった」

僕と翼でパラソルを建て、下にビニールシートをひいて荷物を置く。女の子はまだ誰も来ていない。

「相変わらず悠斗は背が低いなー。しかも、めっちゃ腕とか細いし。ちゃんとご飯食べてるのかよ？」

「うるさいなあ。ちゃんと食べてるし、背だつてまだ伸びてるよ」

「いや、お前もう背は伸びないだろう…。165センチはいつてるのか？」

「そ、それくらいはあるよ！ ……きつと」

「はははっ。でも、あんまり気にするな。それでもお前はモテるん

だから。…ちよつと、泳いでくるから荷物番よろしくな」

「あ、ちよつと翼！ 勝手だなー。…僕がモテることなんてないと思うけどな」

「どうしたの？」

「え？」

声がして振り返ると、そこには水色のビキニを着たルイスが立っていた。肩まで伸びていた金色の髪はポニーテイルにされていた。

「その、どう…かな？」

「え、えつと、その…、とても似合ってると思います…」

僕は思わず下を向いてしまった。普段気の強いルイスが、水着で金色の髪をポニーテイルにして少し顔を赤くしている。それを見て、とてもかわいいと思ったと同時に、なんか恥ずかしくなったのでまともにルイスの顔が見れなかった。

「あは、ありがとう。それで、上条君は？」

「翼は泳ぎに行っちゃった。僕は荷物番だよ。後の二人は？」

「もうすぐ来るはずよ。……ほら来た」

「早いですよ、ルイス先輩！ あ、都住先輩お待たせしました！」
「ま、待って。あたしも」

そういうと、二人が来た。七海さんは写メで見たとうりの白のビキニ、彩音は全体がピンクのワンピースだった。どっちも似合っていて眩しいくらいだった。

「どうですか先輩！ 似合ってますか！？」「ゆ、悠斗、あたしも似合ってる？」

「うん…とっても似合ってます」

「どうしたんですか？ 先輩、顔が赤いですよ」

「なんでもないよ！ ほ、ほら、僕が荷物番してるから行ってきていいよ」

「荷物番は佐倉がするからいいわ。お願いね、佐倉」

「かしこまりました、お嬢様」

いつの間にかルイスの後ろに立っていた佐倉さんが頷く。…こんな暑い中、メイド服で大丈夫なのかな。

「あの、暑くないですか。大丈夫なんですか……」

「大丈夫です。それよりも、先ほどから桐原様と呼んでおりますので行った方が良いかと思えます」

「ほら、先輩早くー。海、気持ちいいですよ」

「今行くー……。……佐倉さん、あまり無理しないでくださいね」

佐倉さんが首を縦に振るのを確認して、僕は海へと向かった。

第17話

「おりゃー！」

そうして、五人で遊ぶことに。水の掛け合いをしたり、ボートを使って少し沖に出てみたり、ビーチバレーをしたりと楽しい時間だった。今は、みんなで砂の城を作っていた。僕は…隣でなぜか、埋められていた。

「ちょっと！ そろそろ出してほしいんだけど」

「出してほしいですか？ だったら、助けたご褒美がほしいです」

「ご褒美？」

「はい、そうですね……出してあげたら、二人っきりでボートに乗ってほしいです」

「ボートに？」

「はい。二人っきりですよ」

「それなら……」

「「ちょっと待った！」」

「ルイス先輩と彩音先輩…。今いいところなんです」

「そんなのダメに決まってるでしょ！ なら、私が出てあげるわ。」

そしたら、二人つきりでボートなのよね？」

「ルイスもなの？ 別にいいけど…」

「ダメー！！ ゆ、悠斗はあたしが出してあげるわよ」

「ちょっと待つて下さい！ 私が先に都住先輩に言ったんですよ。早いもの勝ちです」

「そんなのは関係ないわ！ だから……」

三人で、わーわーと騒ぎ始めてしまった。誰も譲ろうとはしない。……いい加減に出してほしいんだけどな。

「じゃあ、悠斗に選んでもらえばいいんじゃないかしら？」

「む、それはそうですね。それなら文句ありません」

「わかったわ。あたしもそれなら文句ない」

「「悠斗（先輩）！」「」」

「は、はい！」

「「誰に出してもらいたい（ですか）！？」」「」」

「……誰でもいいです」

「「それはダメ（です）」「」」

「ええ…。なら、じゃんけんで決めて下さい」

「「「……………」」」

「どうしたの？」

「「「ホント、鈍感……………」」」

「？」

なんでしょうね、三人とも僕をかわいそうな子を見るような視線だけど。おかしいこと言ったかな？　そして、じゃんけんが行われた。結果は……………彩音が勝った。

「やったー！。悠斗、今出してあげるからね」

「うん、ありがとう彩音」

じゃんけんに負けたルイスと七海さんは少し悔しそうな顔で、パラスルの方へ戻って行った。

「よいしょ…、これでいいわね」

「やっと出れた……………」

「それじゃあ、ボート乗ろ！　ほら、早くー」

「わかった。ちょっと待ってよー」

そして、僕と彩音の二人でボートに乗って沖に向かって出た。もち

ろん、僕が漕いでます。

「うわー、ホントにキレイな海ねー。あ、悠斗！ 魚がいるわよ」

「つ、疲れた…」

「もう疲れたの？ だらしないわね、男の子なんだからもっとしっかりしなさいよ」

「これでも、彩音よりはしっかりしてるつもりだけどね……」

「なんですって！」

「あはは、冗談だよ」

「全く……あんたは……しっかりしすぎなのよ……」

「彩音？」

「なんでもないわ。悠斗、見て。砂浜があんなところに」

「立つとあぶないよ。揺れるから……うわぁ！」

「きゃっ！」

その時、波のせいでボートが大きく揺れた。立っていた彩音がバランスを崩して倒れてくる。

「……………」

僕の方に倒れてきたため、彩音と密着してしまっている。目の前には彩音の顔があつて、お互い気まずいので黙っている。

「あのー、そろそろ立てる？」

「え、あつ……」、「ごめん」

素早く彩音が立ち上がり、顔を真っ赤にしてすぐに背を向けてしまった。僕の心臓は、まだドキドキしていた。

「大丈夫？ ケガとかなかった？」

「大丈夫……。ねえ、悠斗は今、好きな人とかいる？」

「え？ 今はないけど……。どうしたの、突然」

「あたしはいる。ずっと昔からその人を見てきた。けど、その人はとても強いんだ。なんでも一人で出来て、あたしなんかよりずっとしっかりしてて……。きっとあたしなんて必要ないんだろうなあ……。……って思っちゃうの。……ひっく、きっとあたしがいても邪魔になっちゃうって……。っ、思っちゃうの」

「彩音……」

「でも、でもね、それでもその人のそばに居たいの！」

「……なら、そう言えればいいんだよ」

「でも……」

「その人は強いかもしれない、その人はなんでも一人で出来るかもしれない。でもさ、それでも一人では生きていけないかもしれない。いくら強い人でも悲しくて、泣いてしまうときがあるかもしれない。その時、彩音がそばにいてくれたら、その人を慰められる」

「悠斗……」

「一人でできることでも、二人ならもつと早くできるかもしれない。なにより、楽しく出来る。一人は楽しくないんだよ……だからさ、彩音が必要ないことは絶対にないよ。きっと、その人も彩音が必要としてくれるはず。……だから、泣かないでよ」

「だ、だって……」

「彩音が笑ってないと僕まで悲しくなっちゃう。彩音はさ、笑顔が似合ってるんだから」

「…うん。ありがとう、悠斗」

目はまだ少し赤いが、泣きやんで笑顔を僕に向けてくれた。それを見て、安心すると同時になぜかドキドキした。

第18話

「疲れたー」

彩音が落ち着いた頃、僕たちは砂浜へ戻ってきた。日も暮れ、寒くなり始めたので荷物をまとめてコテージに戻った。

「夕食は佐倉が用意しているわ。それまで、待ちましょう」

「私、もうお腹ペコペコですよー」

みんな今は、ロビーのソファでくつろいでいた。確かにお腹が減った。待ってるだけじゃ落ち着かないから手伝おう。そう思い、キッチンに入って行った。

「佐倉さん、僕も手伝いますよ」

「いえ、お客様に手伝わせるなんてできません。すぐにご用意いたしますのでもうしばらくお待ちください」

「けど、五人分を一人で用意するのは大変ですよ。あ、お皿出しますね」

「……すみません。ありがとうございます、都住様」

そして、二人で夕食の準備に取り掛かった。一方、ソファに残った人はというと。

「都住先輩、いつの間にキッチンへ。エプロンが似合ってますねー」

手伝いに行こうかな…」

「私も手伝いたいけど……」「だったらあたしだって……」

「やめとけ、残った女子は誰も料理は出来ないんだろ。行っても邪魔になるだけだ。大人しくしとけ」

「……うう……」

翼の言うとうりだった。ルイス、彩音、七海の三人は誰も料理が出来ない。なので、キッチンに行っても邪魔になるのはわかっていた。だから三人はこれから料理ができるように教えてもらおうと思った。

「……うまい！」「……」

「お粗末さまです。都住様も手伝っていただいてありがとうございます」

「いえ、佐倉さん料理がうまいので勉強になりました。おいしいですよ」

「ありがとうございます」

こうして夕食が終わった。その後、ロビーでトランプなどで遊んだ。時間は九時になろうとしていた。

「そろそろお風呂ね。先、男子行っていいわよ」

「お、そうか。よし！ 行こうぜ、悠斗」

「うん」

「では、ご案内します」

佐倉さんに案内されてお風呂に。翼と二人でお風呂なんて、小学校以来かもしれない。滅多にそんな機会はないからね。

「お、さすがに広いな。いい景色じゃん。ほら、見てみ悠斗」

「ホントだね。キレイだ……」

先に頭を洗って、体を洗う。そして、湯船につかった。ちょうどいい温度だった。

「なあ、1週間後にクラスに奴で集まって遊ぼうって話があるんだけどさ、悠斗もどうだ？」

「そうなんだ。1週間後……ダメだ。その日は……」

「なんかあったっけ？……そうか、墓参りがあるか」

「うん。だからいけないや。ごめん」

「気にすんな。また別の日に誘うから。……悠斗はさ、まだ女子が苦手なのか？」

「……そうだね。わかる？」

「平気そうな顔はしてるけどな。まだ時々、女子には敬語使ってるだろ。……でも、そうか」

「やっぱり、僕には女の子はよくわかんないんだよ」

「でも、俺としては克服してもらいたいな。お前には幸せになってもらいたいし」

「…ありがとう、翼」

「何より、そんなんじゃ彼女も出来ないからな！俺、先上がるわ。ちゃんと温まれよ」

そう言つて、翼は先が上がって行つた。一人になって考えろつてことなのかもしれない。確かに僕は女の子が苦手で普段はあまり話さないようにしている。そうなつてしまったのは僕が過去に女の子と良くないことがあつたから。でも、あの時……

「あー、やっぱりわかんないや。もう上がろう」

男子が上がつて、今度は女子がお風呂に行つた。今、僕と翼は部屋でのんびりしている。明日は何をしようかと話していた。

「でさ、悠斗は今ところ好きな人とか居ないの？」

「え、なんで突然そんな話になるのさ！」

「んー、なんとなくかな。彩音とかどうなの？」

「彩音は…幼馴染だから」

「じゃあルイスは？」

「ルイスは隣の席だし。転校してきたとき、僕がいろいろ教えただけだよ」

「じゃあ、あの後輩ちゃん。七海ちゃんだったけ？」

「七海さんは僕が卓球を教えてただけだよ。それに、僕に好意を抱いてくれるわけないよ。みんなレベルが高いんだから、僕なんかじゃ釣り合わないよ」

「（こりゃ、重症だな……） だったらさ、三人が告白してきたら悠斗はどうする？」

「そんなのあるわけないよ。だからわかんない」

「でも、ルイスには告白されたんだろう？ 十分考えられるんじゃないか？」

「そうだけど……」

「どうなんだ。誰にも言わないから教えてみ」

「翼はどうなのさ！ 僕はっか不公平だよ」

「俺は告白はされてないからな。それに今は部活をしていたい。はい、答えた。悠斗は？」

「僕は……」

「」「わあああ」「」

その時、突然お風呂上がりたての三人が滑りこんできた。どうやらドアに寄りかかりすぎて倒れたらしい。

「おい、盗み聞きはよくねーな！。悠斗、この話はまた今度な」

「わかった。…どうしたの、三人とも？」

「「「な、なんでもない！。おやすみ！」「」」

「？ おやすみ…」

それだけ言つと、三人は慌ただしく部屋を出て行った。隣で翼はずつと笑いを必死にこらえていた。

第19話（前書き）

最近、忙しかったです。遅れてすみません。

第19話

「あと少しだったのに……」

あわてて三人で二階の部屋へと戻ってきた。お風呂からあがって、みんなで遊ぼう、と思って行ったら気になる話をしていたのでこそり聞いていたのに、バレてしまった。あの時、悠斗は誰を選んだらう。……私だったらいいのに。

「どうしたんですか、ルイス先輩？　ボーっとしてますけど」

「え、別になんでもないわ」

「それにしても、都住先輩って鈍感ですよね」

「そうよね……。私は昔から悠斗と一緒にいたけど、あそこまでとは思ってなかったわ」

「それは自慢ですか」。昔からの都住先輩を私は知っているって自慢なんですか」

「そ、そうゆうわけじゃないわよ。それよりあたしは、桐原さんと悠斗の出会いを聞きたいわ」

「あ、それは私も気になるわ。寝るにはまだ早いから教えてよ」

「それは……別にいいじゃないですか」

「悠斗のこと好きなんですよ」

「……好きです」

「私も好きだもん。だからこそ、教えてほしいわ」「それもそうね。あたしも教えてほしい」

「…わかりました。少し長くなりますよ」

「「いいわよ」」

「あれは、私がまだ高校に入ったばかりのことでした……」

私は中学まで部活をしてなくて、高校に入ってから部活に入ろうと思いました。その時、同じ中学だった友達が「一緒に卓球部に入らない？」って誘ってくれたんです。私はどの部でも別にいいや、っと思っていたのでそのまま卓球部に入りました。

今年の卓球部は人数が多かったので、一軍と二軍に分けることになりました。もちろん、試合をして決めました。私は卓球どころか、まともにスポーツをしていなかったので全然勝てずに二軍行きでした。一緒に入った友達は一軍でした。

二軍になると、先生は練習を指導してくれませんでした。代わりに二年の先輩が来てくれました。その時、都住先輩と初めて会いました。都住先輩は真面目に練習を教えてくださいました。

当番制で先輩が入れ替わって教えてくれましたが、ほとんどの先輩が来てくれませんでした。

当り前ですよ、二軍の練習見てるなら自分の練習した方がいいですもん。

それでも、都住先輩はサボらず来て練習を見てくれました。自分の担当でない日でもたまに来てくれました。私は気になったので、思い切って聞きました、「自分の練習する時間はあるんですか？」って。そうしたら、「そんなことは気にしなくてもいい」とだけ言いました。私はそれ以上は聞きませんでした。

それでも、私はずっと二軍でした。早く一軍に上がりたいって思ってた、私は練習が終わっても一人で残って練習しました。ある日、残って練習してたら都住先輩に見つかったんです。「やば、怒られる」って思ったんですけど、都住先輩は優しく笑って「僕も残って練習していいのかな」って言うてくれたんです。

それから、都住先輩は毎日残って私の練習に付き合ってくれました。先輩だって疲れてると思うのに、そんなそぶりは全然見せずに付き合ってくれました。だから、今度こそ一軍に上がろうって思ったんです。ここまでしてくれたんだ、これで一軍に上がれなかったら先輩に申し訳ないと思いました。

そして、一軍二軍を分ける試合が始まるうとしてた時、一緒に入った友達が私を見て「なにそんなに頑張ってるの？ 才能ないんだから諦めれば」って、みんなの前で言いました。

そして、私を笑いました。周りの人も笑ってました。私だって、才能がないくらいわかってました。だから、練習したのに、なんで笑われるんだと思いました。気づいたら私は泣き崩れてました。悔しくて、笑われてる自分がみじめで泣いてました。

その時、パァン！って音が響きました。音がする方を見ると、都住先輩がその友達の前に立っていました。先輩が友達のほっぺを叩いたとわかって、先輩を見るとすごく怒った顔をして友達を睨んでいました。そして、怒鳴るような声で言いました。

「笑うな。君は知らないと思うけど、桐原さんは1軍に上がろうと遅くまで一人で残って練習していたんだ。その努力を笑う資格は君にはない。今すぐ桐原さんに謝れ！」

私はびつくりしました。今まで怒った都住先輩は見たことなかったのです。そして、嬉しかったです。わかってくれる人がいるって思ったから、私はそれが嬉しくてたまりませんでした。その後、その友達は謝ってくれました。

そして、私はやっと一軍に上がりました。初めて一軍での練習のときに、都住先輩が「おめでとう。桐原さんがずっと練習してきたのは僕は見てきたからね。よく頑張ったよ、これからもよろしくね」と言ってくれました。私は、ともに都住先輩の顔を見ませんでした。その時、私は都住先輩のことが好きだってわかりました。

それから、都住先輩は卓球部で人気者なんだって知りました。先輩達と付き合いはいいし、後輩の面倒見もいいので、みんなが都住先輩を必要としました。

それから、一緒に練習できるのが本当に嬉しかったです。そして、いつか先輩に認められたら告白しようと思っていたんです。けど、先輩はお家の事情で部を辞めてしまいました。

「そうだったんだ……」

「はい。これが私と先輩の出会い……ですね」

「桐原さんもいろいろあったんだね」

「はい……。あ、そろそろ寝ましようか。明日もいっぱい遊ぶんですよ」

「そうね、じゃあおやすみ」

「「おやすみ（なさい）」」

それだけ言つて、私は布団に入った。……桐原さんと悠斗にそんなことがあったなんて知らなかった。今思えば、私は悠斗のことを何も知らない。まだ出会つて四ヶ月ちよつとだ。私はもっともつと悠斗のことを知りたいし、私のことも知ってもらいたい。そして、すべてを受け入れてもらいたい。彩音と桐原さんはライバルであつて、とても厚い壁になるだろう。けど、負けたくはない。そう強く思い私は眠りについた。

あれからもう四ヶ月か……。あの時からずっと都住先輩を好きだったけど、ライバルにルイス先輩と彩音先輩がなるとは思わなかった。ルイス先輩はおそらく校内ナンバー1の美少女だろう。彩音先輩だって、劣らずの美少女だし、都住先輩とは幼馴染で昔からいろいろ知ってるんだろうな。それでも、私は都住先輩がいいんだ、絶対に振り向かせてやる。そう思い私は眠った。

ルイスと桐原さんか……。私は小さい頃から悠斗と一緒にいた。そ

れは今でも変わらないけど、それだけだ。悠斗はあたしを一人の女の子として見てくれるだろうか？ただの幼馴染としか見てくれなかったらどうしよう……。ルイスと桐原さんと比べられた時、あたしを選んでくれるのだろうか……。あたしは自信がないけど、それでも悠斗の隣にいたい。そして、いつか……。そこであたしは眠りについた。

第20話（前書き）

とうとう20話目です。これからもどんどん更新していこうと思うので、よろしくお願いします。

第20話

「今日は親睦会みたいな感じにしたいと思います」

突然、ルイスが宣言した。今日は海に来て2日目。今は、一階のロビーにあるソファアールでみんなくつろいでいた。ちなみに今は、午前10時です。佐倉さんがみんなにジュースを配ってくれる。

「えっと、せっかく海に来たのに？」

「天気予報でこれから雨の予定なの。だから今日海は中止」

テレビをつけて、天気予報を見ると「全国的に雨の予報です」とお天気のお姉さんが笑顔で言っていた。外を見ると厚い雲で覆われている。

「でも、ここにいただけもつまらないから、お互いのことをもつとよく知ろうとゆうことで親睦会にしましょう！　まず、自己紹介。私はルイス「C」ソフィア、今年17歳、身長は165センチ、趣味はクラシック鑑賞、好きな食べ物はカルボナーラ、好きな色は赤、くらいかしら」

「じゃあ、次は私が。桐原七海、今年16歳、身長は155センチ、趣味は卓球、好きな食べ物は甘いもの、好きな色は黄色、です！」

「ねえ、身長まで言わないとダメなの？」

「バカだな、そこが一番重要だろうが。俺は上条翼、今年17歳、身長は175センチ、趣味はバスケット、好きな食べ物は悠斗が作った

カレー、好きな色は黒、だな」

「ゆ、悠斗が作ったカレーって……」「おいしいんですか？ 上条先輩」

「別にいいだろう。悠斗が作ったカレーが俺の中で一番好きなんだ」

「そうなんだ……。あたしは桜沢彩音、今年17歳、身長は158センチ、趣味は弓道、好きな食べ物はオムライス、好きな色はピンク、かな」

「……都住悠斗、今年17歳、身長は16……センチ、趣味は体を動かすこと、好きな食べ物はハンバーグ、好きな色は白……」

「悠斗、ごめん。身長のとこがよく聞こえなかった」

「そんなわけない！」

「ごめん、私も聞こえなかったわ」「私もです！」「あ、あたしも」

「みんな聞こえなかったみたいけど」

「うう……163センチです」

「嘘！ 私より2センチも低かったの！？」

「そうだったんですかー、でもそんなに気にすることないですよ」

「そうよ。少なくとも、あ、あたしは……気にしないわよ……」

「僕は気にしてるの！」

だから言いたくなかったのに。でも、まだこれから伸びるって信じてる。牛乳飲んでるし、適度に運動はしてるし、きっと来年には170センチくらいに……

「いや、それは無理だな」

「心を読まれた！？ それはわかんないじゃん！」

「いいか、悠斗。成長期という期間があつてだな、それを終わると……」

「あー、あー、あー。きーこーえーない」

「でも、そこまで気にしなくてもいいんじゃない。別に問題ないでしょ」

「僕はもう子供扱いされたくないの！」

「いや、都住先輩。もう子供扱いなんてされなと思いますけど」

「それがあるんだよなー。ついこの間のゲーセンとか」

「ちょ、翼、それは……」

「なになに、ゲーセンって何の話？」

「えつとな。この間、悠斗と俺でゲーセンに行ったんだ。ゲーセンは基本16歳未満は18時以降は帰らないといけないんだ。ゲーム

に夢中で時間を忘れててな、もう19時だったんだ。それで悠斗を見かけた店員が「お客様、18時以降に16歳未満の入場はできませんので…」って言われたんだ。そしたら悠斗が怒ってな「僕はもう17歳です！これ、学生証です」って見せたんだ。それ見て店員がびくりして「も、申し訳ありません」って去って行ったんだ。あつはつは、今だに中学生に間違えられるからな、悠斗は「

「あはは、都住先輩、年齢確認されたんですか。私はその時間まで居ても年齢確認されませんでしたよ」

「悠斗は背もそうだけど、顔も幼いからね。昔から、女のあたしより可愛いって周りから言われてたわよね」

「ふ、ふふ、そうね。悠斗は可愛い顔してるから店員も中学生に見えたのかもね」

「僕もう寝るね、おやすみ」

「ちょ、バカ、まだ起きたばっかだろうが」

「厳しい現実には耐えられない。心に深い傷を負った。ショックで寝込む」

「落ち着けて…、笑ったのは謝るから」

「」「ごめん（なさい）」「」

「……わかった」

確かに僕は昔からかっこいいと言われたことはなかった。周りは可

愛いとしが言わなかった、男の子に可愛いつていうのはどうなんだ？ 見た目だけで子供だつて判断されるからヤダ。もっと背が高ければ……。

「他にもあるんですか？」

「そうだな、これはあんまり関係ないけど、昔、彩音の服を悠斗に着せて遊んだことがあったな。そうしたら悠斗があまりにも似合いすぎて女の子にしか見えなかった。彩音のお母さんは「この子、誰？」って言つてたしな」

「僕はショックだったよ……。普通わかるでしょ？」

「いやいや、あの時のクオリティの高さつて言つたら……あれでホントに女の子だつたら俺は惚れていたな」

「そんなことないでしょう」

「ルイス先輩、彩音先輩……」

「桐原さん、なんとなく言いたいことがわかるわ。どうやってやるか？」

「あたしに任せて。ねえ、ちょっとトランプでもしない！ ババ抜きやろうよ」

「いいわね。負けた人には罰ゲームを作りましょう。そうね、「一番はじめに抜けた人が負けた人に命令が一回出来る」で、どうかしら？」

「賛成です！ ほら、やりましょう」

「突然どうしたの……」

「（そうゆうことか） まあ、いいんじゃないね。もちろん、命令は絶対なんだろう？」

「当然よ！」

なんだろう……女子の三人がすごいやる気だ。翼もなんかニヤニヤしてるし……。負けたらどんな罰ゲームなんだろう……。まあ、負けなければいいだけだね。

…………… 負けてしまいました。

第21話

「さて、勝ったのは私よ!」

すごい笑顔なルイスがいる……。周りもすごいニヤニヤしてる……。なんか怖いな。

「それじゃあ、悠斗に命令するわ! ……女装しなさい!」

「「「いえーい!」」」

「ええ!? や、やだよ」

「やだ、じゃないの。これは命令よ! 絶対の命令なの!! 佐倉、服を用意して。そうね、女子の制服でいいわ」

「かしこまりました、お嬢様」

「待つてよ! スカートは無理だつて!」

「大丈夫ですよ。都住先輩なら似あうはずですよ」

「つ、翼。スカートは無理だね? 見るに堪えないって」

「ん、案外そうでもないんじゃないか。何事も経験だよ」

「そんな経験したくないよ! 彩音は止めてくれるよね!」

「頑張つて! 悠斗!」

「では都住様、こちらへ」

「そんな……」

そうして悠斗は佐倉に連れられて部屋を出て行った。残った四人は、どうなるかを話し合っていた。

「どうなりますかね、都住先輩。案外、男ってわかつちゃったりして」

「でも、顔は可愛いほうだからわからないわよ」

「悠斗の女装が、久々に見るわね」

「さあな、全く予想できない。それより、いいこと思いついたんだけど聞いてくれるか……」

翼が考えを三人に教える。それを聞いて、それに三人とも賛成した。四人とも、とても面白そうな顔をしていた。

「お待たせいたしました」

「あ、佐倉から見て悠斗はどんな感じだった？」

「……びっくりです」

「」「」「び、びっくり」「」

「見た方が早いと思われます。都住様、どうぞお入りください」

ガチャ

僕は四人が待つ部屋に入った。もちろん、女の子の制服で。四人の顔を見るとボーッと僕を見ていた。高校の制服は紺のブレザーで中は指定のYシャツ。スカートはグレーのチェック柄のやつだ。そして、黒のタイツまではいている。うう……恥ずかしい。

「ほ、ほら、やっぱ無理だって」

「……悠斗、いや、悠子ちゃん！」

「止めてよ。恥ずかしいんだけどこれ……ダメだね、これ」

「（予想以上に女の子ね……、しかも、可愛い）」

「（都住先輩……ですよね……）」

「（昔よりレベルが上がってる気がする……）」

「三人とも！　なんか反応してよ！」

「え、ああ、可愛いわよ、悠子ちゃん」

「そうですよ！　どう見ても女の子です。女の私よりも可愛い気がします」

「……悠斗、女の子じゃないの？」

「嬉しくないよ……。彩音はさらっとひどいこと言ってるし……。も

う着替えていいよね。限界……」

「それなんだけどな、悠子。今日はこのままトランプ大会にしよう
と思っ^てな。お前は勝つまでそのままだ。着替えなければ勝つこと
だ」

「ええ！？ この格好のままトランプするの！？」

「そうよ、あ、佐倉、写真撮って」

「かしこまりました」

パシャ、パシャ、パシャ

「うわあ、何勝手に撮ってるんですか！？ 翼も、隣に来てピース
しないで！ ああ、いつの間にか全員入ってるし！」

「ほら、悠子ちゃんも笑って！」

「笑えないよ！」

「よし、記念撮影も終わったな」

「うう……落ち着かない……」

「まあまあ、悠子ちゃんが勝てばいいのよ」

「もう僕は、悠子で決定なんだね……」

「悠子ちゃんが勝てば、今度は命令ができるんですよ。頑張ってく

「ださい」

「ぷっ…悠子ちゃん、こっち向いて」

「彩音はさっきから笑いすぎ！ 写メ撮らないで！」

「あ、桜沢先輩、あとで送ってくださいか？」

「いいわよ。ルイスもいる？」

「もちろんよ！」

「あ、彩音、俺も」

「ああー、次やるよ、次！」

そして、二回戦目が行われた。今度は絶対に勝たないと…、勝って服を取り戻さないと。

………また、負けた。…なんで？

第21話（後書き）

感想お待ちしております。

第22話

「あはは、私の勝ちですね。では、都住先輩、……………今度はメイドの格好でお願いします」

「あ、それいいわね。佐倉、メイド服貸してあげて」

「かしこまりました。都住様、どうぞこちらへ」

「や——ーだ——ー」

佐倉に連行されて行った。それにしても、楽しいなあ。彩音と桐原さんは携帯の写メを用意してる。あ、上条君もだ。それにしても……

「案外気づかないものなのね。悠斗には悪いけど、ずっと負けてもらいましょ」

「悠斗は真面目だからな。まさか、この四人が結託してるなんてわからないだろうな」

「悠子ちゃん可愛いですねー。この写メは永久保存ですよ」

「もう、悠子ちゃんになっちゃえばいいのにね」

「…思ったんだけどさ、悠子ちゃんになったら、この中の誰よりも女の子らしいんじゃない？ 料理、洗濯、掃除は完ぺきだし。そしてあの可愛さ」

「「「……………」」」

「お前ら三人合わせても悠子ちゃんに勝てない……。男なのがつたいない、ホントに女の子だったら俺は惚れていたな」

「（なんか…複雑）」

「（確かに、悠子ちゃんだったら勝てる気がしないです…）」

「（悠子ちゃん…恐るべき!）」

「お、お待たせしました」

「あ、佐倉。今回はどう？」

「ま、負けました…」

「」「」「ま、負けた!？」」「」

「はい……都住様、どうぞ」

ガチャ

「……………もう、勘弁して下さい」

僕は部屋に入った。…メイド服で。なんか、ヒラヒラしたスカートとか無理だ。さっきよりも少しスカートが短いし、カチューシャとか付けてるし。もう泣きそうだ……。

パシャ、パシャ、パシャ

「無言で撮らないでよ！　なんか怖い」

「悠子ちゃん……、なんで男なんだ！　性別を間違えて生まれてきてるぞ！」

「うるさあい！　僕は男だ！」

「悠子ちゃん……、お願い、「おかえりなさいませ、お嬢様」って言うてほしいわ」

「ぜつつつたいにヤダからね！」

「いいじゃないですか、悠子ちゃん」

「僕、先輩だよね！？」

「お願い！　悠子ちゃん、ムービーで保存するから」

「さらに酷いから！」

「悠子ちゃん、ここにさっき撮った制服バージョンの悠子ちゃんがある。言ってくれないと、うっかりクラスの全員に送信してしまいそうだな。あ、俺は「おかえりなさいませ、ご主人様」でお願い」

「あ、私も」「私も、卓球部の全員に見せてしまいそうです」「あたしはお母さんに見せようかな」

四人が脅迫まがいなことを言ってる。多分、言わなかったら本当に送るだろうな。四人とも、もうカメラの準備してるし。でも、こんな姿をクラスの人達にさらすくらいなら……。

「お、おかえり、なさい、ませ、ご主人様…、お嬢様……」

「「「「……」「」「」」

「……ぐすつ」

「ぐは！ 悠子ちゃん、それは反則だ……」

「悠子ちゃん……、女の私でもあなたは可愛いつて言いきれぬわよ」

「もう何も言えないです……」

「か、かわいい……」

パシャ、パシャ、パシャ

「佐倉さんは無言で撮り続けなさい！」

「し、失礼いたしました。つい……」

「はあ…、もうヤダ……。なんで僕がこんな……」

「いいじゃねえか、可愛いんだし。もう、女の子になれば？」

「ヤダよ……」

「それでも、似あっていますねー。一回悠子ちゃんて学校行きませんか？」

「何言ってんの!？」

「悠子ちゃん悠子ちゃん、はい、ピース」

「恥ずかしいからやめて」

「そろそろお昼にしましょうか。おなか減ったし。佐倉、お願いね。あ、悠子ちゃんにも手伝ってもらおう?」

「そうですね。よろしいでしょうか?」

「あのね、「よろしいでしょうか?」じゃないですよ! 手伝ってもいいけど、着替えさせてください」

「それじゃあ、意味がないだろう?。いいのか、悠子ちゃん? うっかりクラス全員に写メが飛んでくぞ」

「その脅し、反則」

「都住様、お願いいたします。手伝っていただけたら助かります。……その恰好で……ふふ」

「はあ、わかりましたよ。手伝いますよ」

「よし! 写真は任せろ! この1200万画素のデジカメでばっちり撮るからな!」

「じゃあ、あたしはムービーで撮るわ!」

「私は写メで撮りますね。あとで、みんなの携帯に送信しておきま

す」

「頑張つて、悠子ちゃん」

「その妙なチームプレイはやめて！」

そうして、大量のフラッシュを浴びながら僕は佐倉さんと昼食を作った。メイド服が動きづらい、シャッター音がうるさい、フラッシュが眩しい、どれも今までにない体験だった。昼食を作り終わって、ようやく僕はメイド服から解放された……。

第23話

「……………」

「おい、そんなお前拗ねんなって、悠子」

「悠斗だからね！　少しは訂正しようとして！」

「よかつたじゃないか、新しい自分に目覚めて」

「目覚めてないよ！　もう二度としないからね！」

「えー、悠子ちゃんはまだ見れないんですかー」

「それはもったいないわ。悠斗、考えなおして」

「悠斗、たまにでいいからね」

「あれこれ言っても、ヤダものはヤダ！」

全く、ひどい目にあった。携帯には大量の画像が送られてきている。……もちろん全部、僕の女装姿の写真たちだ。彩音たちは携帯見ながら笑ってるし、翼もニヤけてるし。はぁ…もう二度と女装はしないよ。

「さて、今日で最後なのよ！　思いっきり遊びましょう！」

「……………」
「わーーーー……………」

水着に着替え、四人は海へ走って行ってしまった。…って僕置いてかれてる！？　あの四人仲良くなったよなあ。あ、ゴーグルないから部屋に取りに行かないと。

「えーっと、確かこの辺に…」

「……………」

「あれ、佐倉さん。どうしたんですか？　顔色が悪いですよ」

「いえ……、なんでもありませんから……………」

「そうですか？」

そう言つて、僕は佐倉さんの額に手を当てる。あれ、ちょっと熱があるんじゃないか？

「あ、あの、大丈夫ですので」

「あ、」

佐倉さんは奥へと歩いて行ってしまった。本人が大丈夫って言ってるんだから大丈夫なんだろうけど…、少し心配だな。たまに様子を見にこようかな。そう思い、僕はコテージを出て、海へと向かった。

「先輩、おそーーい！」

「遅いぞ！　ちよつと泳ごうぜ！」

「あ、ごめん、パスする。ちよつと、ルイスいい？」

「何？　どうかしたの？」

「聞きたいことがあるんだけど……」

「もしかして、佐倉のこと？」

「そうだけど、なんでわかったの？」

「私も佐倉のことで悠斗に頼みたいことがあったから……。一度コテージに戻りましょ。飲み物が欲しいし」

「わかった」

僕はルイスとコテージに戻ることに。それにしても、佐倉さんのことで僕に頼みたいことってなんだろう……。わざわざコテージに行くことは彩音や翼にはあまり聞かれたくない話なのかな。そんなことを考えながらコテージに入った。

「他の人には聞かれたくない話？」

「そうね……。飲みものも持つてくるから……。え、さ、佐倉！？」

ルイスは顔を真っ青にして床を見た。するとそこには佐倉さんが倒れていた。苦しそうに呼吸し、ぐったりしていた。

「大丈夫ですか！？　ルイス、ベットに運ぼう。手伝って」

「わかったわ」

「よいしょつと…」

僕は丁寧に佐倉さんを抱きあげた。そして、僕の使っていたベットへと運んだ。額に手を当てるとすごく熱かった。汗もかいてるし、苦しそうだ。僕はタオルを濡らし、絞って持ってきて佐倉さんの額に乗せた。

「落ち着いたかな……。もう大丈夫だと思う」

「よかった……。ゆっくり休んでもらいましょう。ここで話は出来ないからロビーに行きましょう」

「ここで佐倉さんを見ていたほうがよくない？　いつ目を覚ますかもわからないし」

「だからよ、佐倉に聞かれたくはない話だから…、お願い」

「…わかった」

僕とルイスは佐倉さんを残し、部屋を出た。ロビーに戻り、僕はソファに座った。ルイスが冷えた麦茶を持ってきてくれる。

「ありがとう」

「どういたしまして。それでね……悠斗にお願いがあるの」

「佐倉さんのこと？」

「そう……。佐倉とこれからも仲良くしてあげて欲しいの……。実はあの人は、幼いころ両親が行方不明になってるの。それを私の家が

引き取って、家のメイドということと働いてるわ。あの人は誰にも甘えないで一人で生きてきた、なにかも自分の中にため込んでしまっているの。まだ両親が生きていると信じて…」

「そうだったんだ……」

「悠斗には知っててもらいたいの……。そして、これから佐倉の支えになってもらいたいの。それをお願いしてもいい？」

「……僕でいいの？」

「私は悠斗がいいの。私を変えてくれたのは悠斗。だから私は悠斗に頼みたいの。悠斗なら佐倉の支えになれるって信じてるから」

「わかった。僕に何ができるかわからないけど」

「それでもいいの。ホントはね、佐倉って全然笑わないの。けど、昨日からすごく笑ってる…、だから、悠斗だったら大丈夫だよ」

「それはみんながいるからだと思うけど…。わかった、頑張るよ」

「ありがとう…。あと、佐倉の両親のことなんだけど…、実は…、すでに亡くなっているの」

「そんな……」

「私たちも早くあの子と両親を会わせてあげたくて行方を追ったの。そうしたら、二人とも亡くなっていたの」

「だって、佐倉さんは今でも生きてるって信じてるんですよ。……」

それなのに」

「まだ本人に言うのは早いと思って言っていないけど……、そのときは……」

「そうだったんですか」

「……え、さ、佐倉っ」

いつの間にかドアの前に佐倉さんが立っていた。今にも泣きそうな顔で、フラフラになりながらも立っていた。

「私の両親はもう……いないんですね……」

「待つて、佐倉！ でも……」

「そうだっ……たんだっ……っ」

突然、佐倉さんは部屋の外へと走り出した。まずい、今の佐倉さんは何をするかわからない。

「……っ、悠斗、お願い！ 佐倉を追いかけて、そしてこれを渡してほしいの！……お願い。あの人を止めて……」

ルイスは泣きながら僕に手渡した。それはとても、佐倉さんにとっては大切な物だった。そして、僕はそれを持って佐倉さんを追いかけて走った。

「はぁ、はぁ、はぁ」

僕は走って佐倉さんを追いかけていた。そして、佐倉さんがキッチンへと入って行った。おもむろに包丁を取り出し、自分の喉に刺そうとした。

「止めるんだ！」

「……うう……止めないでください。私は両親が生きていればそれでいいと、またいつか会えると信じて今まで生きてきたのに……もう亡くなったんじゃないじゃないですか！ 私が生きる目的が……無くなっちゃったじゃないですかあ……」

「……………」

「貴方の話は聞いてます……。両親がもういないんですよ、それでも貴方は生きてる。でも……私はそんなに強くないんです！ 貴方みたいに、生きてなんていけないんです！」

「……………でも」

「いいんです……。それに私はもう生きていく目標がわからなくなっってしまったんです。だから、これで……………」

そう言って、自分の喉に包丁を向けて目を閉じた。ふと、ルイスから手渡されたものを思い出す。そして、僕は佐倉さんに近づき、左手で包丁を握って止めた。包丁から赤い血が滴る。

「いいわけないだろ！ そんなことして、両親が喜ぶと思ってるのか！？ 本当にそれでいいと思ってるのか！？」

「……ふえ……ぐすっ」

「……僕だつて強いわけじゃないです！ 確かに両親が交通事故にあった日、僕も死んでしまいたいと…、両親の元に行きたいと思いましたが。でも、そんなことしても両親は悲しむだけだつて、言つてくれた人がいるんです！ そう教えられたから僕は生きています。だから…、佐倉さんも生きようとして下さい！」

「…っ…だつてえ……」

「その時、僕はその人に誓つたんです…、強く生きると、これから笑つて生きると。だから、僕は一人で生きてるわけじゃないです。大丈夫、佐倉さんは強い人ですよ。もし泣きそうになつたとしても……」

「……」

「僕が受け止めますから…、今日ぐらい泣いてもいいんですよ。辛かつたら頼つてもいいんですよ。だからもう、この世界で一人だと考えないでください…。僕はもう、佐倉さんの友達なんですから。それに他の人だつて佐倉さんを支えてくれますよ」

そして、僕は佐倉さんを抱きしめた。すべてを受け止めようと優しく抱きしめた。

「あ、あああああ、うわああああああつ！」

「………そうだ。ルイスから預かつてたものが…これです」

そう言つて、僕はルイスから預かつた物を佐倉さんに渡した。それは一枚の写真だつた。

「……あ、あああつ」

佐倉さんの家族三人で撮られた写真だった。三人とも幸せそうな顔をして写っていた。その裏には「幸せに」と書かれていた。

第24話

「おやすみなさい……」

僕は、落ち着いた佐倉さんをベットに運んで寝かせた。泣き疲れたのか、それともスッキリしたのか、ぐっすりと眠っている。とりあえず一安心した。

「悠斗！ 佐倉は！？」

ルイスが慌てて部屋に入ってきた。僕はベットを指差し、それを見たルイスが力が抜けたのか、床に座り込んだ。

「よかった……、ぐす、本当に……っ、よかった……」

「もう大丈夫だと思う。まだ心の整理ができてないと思うけど、時間をかければ大丈夫だと思うよ」

「あ、ありが……とう。悠斗……、ありがとう」

「ううん。気にしないで」

「っ！ 悠斗、その手どうしたの！？ まさか、佐倉が？」

「え、いや、大丈夫だよ。大したことないから」

「何言ってるのよ！ さっきから血が止まってないじゃない！ 今、手当てるから」

そう言つて、ルイスは救急箱を持ってきて、僕の手を手当てしてくれた。包帯を巻かれ、左手を動かしづらくなる。

「これでよし、ごめんなさい、佐倉がやったのね」

「これは自分でやったようなものだよ。だから佐倉さんは悪くないんだ」

「佐倉は休ませたほうがいいわね。帰るのは明日のなつても構わないかしら？」

「僕はいいよ。翼と彩音はわからないけど……」

「聞いてくるわ、佐倉のこと説明したいし。悠斗は悪いんだけど、佐倉を見ててくれる？」

「いいよ、いつてらっしゃい」

満足そうにうなずくと、ルイスは部屋を出て行った。隣を見るとぐっすり寝てる佐倉さんがいる。今までずっと一人でやってきたんだろつな……。僕は佐倉さんの頭を優しく撫でた。

「彩音と七海さんは明日用事があるらしいから帰るつて。上条君は大丈夫らしいわ」

「ごめん、明日の部活はどうしても出ないとダメなんだ」「私もです。すいません」

「そっか、ならしょうがないよ。とりあえず、夕食は僕が用意するね。佐倉さんも起きたらおなか減ってるだろうし、軽く何か作って

おくよ」

「ありがとう、お願い」

「悠斗ー、今日も悠子ちゃんできて」

「あれ、お鍋どこだろう?」

「メイドでいいからさー」

「これは火を通しすぎないように…」

「…写メって一気に何枚送れるんだっけ?」

「あー、もう、ヤダからね! 絶対にメイドの格好なんてしないから! そこ、カメラの準備しないで!」

「…そんなー」

「しょうがない…。とりあえず、俺は洗濯とかしておくから。飯ができたら呼んでくれ」

「わかった、お願い」

「それと、悠斗は左手怪我してんだろ、皿出すくらいは誰か手伝ってやれよ」

「…!?!?」

「あ、うん、誰かお願い」

「じゃあ、私が手伝うわ」「都住先輩、私が手伝います!」「あ、あたしが手伝うから」

「えっと、一人でいいよ?」

「だから私が手伝うからいいわよ」「私がやりますよ、先輩は休んで下さい」「あたしがやるわよ!」

「」「悠斗（先輩）は誰に手伝ってほしい!?!」「」

「...えーっと、その...」

「キリがねえな。ここは食器の場所がわかるルイスだ。他は、できたら運んだり、洗い物したりしろ」

「わかったわ」「それならしょうがないですねー」「洗い物なら任せなさいよ!」

「うん、お願い」

そうして、夕食作りを進めた。左手が使いづらいけどなんとかった。ルイスたちも手伝ってくれたので思ったより早く出来た。七海さんに手伝ってもらって料理を運び、夕食にした。

「相変わらず都住先輩は料理うまいですねー、どれくらいレポートリーあるんですか?」

「んー、そんなにあるわけでもないよ」

「ホント、悠斗は弱点がないわよね……」

「弱点って…、でも僕だって苦手なものはあるよ。たとえば暗いところとか、暗所恐怖症っていうのかな。あと、ジェットコースターも苦手かな。あ、お化けも無理」

「……女の子か!」……」

「別にそうゆうわけじゃないでしょ!」

「都住先輩…、可愛いですね」

「子供っぽいつていうか、身も心も子供なのね」

「悠斗…、そろそろジェットコースターは克服しようよ」

「苦手なんだからしょうがないじゃん、ルイスはさらっとひどい事言ってるし!」

「まあ、悠斗の弱点だな。おっと、もうこんな時間か、女子から風呂行けよ。かたづけは俺らでやっとくから」

「わかったわ。じゃ、桐原さん、彩音、行こうか。お願いね」

「了解」

女子は風呂へと向かって行った。僕と翼で洗い物をしようとする。

「悠斗はその手じゃ洗い物は無理だろ。あのメイドさんになんか持って行ってやれ。そろそろ起きるんじゃないか?」

「そうだね、じゃあ行ってくる」

僕はおにぎりを作って持っていくことにした。まだ寝てるのかな、
と思い僕はノックをして部屋に入った。

第25話

「失礼します。佐倉さん、起きてますか？」

「……はい」

佐倉さんはベットの上で上半身だけを起こしていた。少し目が赤い、起きてからまた泣いてしまったのかもしれない。

「お腹が減ったと思ったので軽く作りましたが、食べれますか？」

僕はおにぎりを佐倉さんに手渡す。そして、近くにあった椅子に座った。

「ありがとうございます…。その、手、ごめんなさい」

「これですか、このくらい平気ですよ」

「都住様を巻き込んでしまって申し訳あり……」

「あの、佐倉さん。敬語はやめましょう。立場的にはしょうがないのかもしれないですけど、僕と二人の時くらい敬語じゃなくていいですよ。僕まだ17歳だし」

「…ありがとうございます。じゃあ、悠斗くんって呼んでもいい？ 私は19歳で年上だけど、敬語じゃなくてもいいから。あと、私は夏希でいいよ」

「年上の人には敬語じゃないと落ち着かないので、その辺は勘弁し

て下さい。夏希さん」

「わかった。…今日は本当にありがとう。それと、巻き込んだじゃってごめんなさい。悠斗くんだって、自分のことで大変なのに……」

「大丈夫です。目の前で辛そうな人がいるなら助けたいですから」

「強いんだね…、もう平気だから先に寝てもいいわよ」

「…無理しないで下さい。話があるなら僕は聞きます、夏希さんの苦しみが少しでも和らぐなら、僕の体くらい、いくらでも貸します。…だから一人で抱え込まないでください」

「……いいの？」

「いいんですよ。もう少し夏希さんは他の人に甘えたほうがいいですよ」

「じゃあ、悠斗くんこっち来てここに座って、ドアの方を向いてね」

そう言つて、夏希さんは自分の隣を指差す。僕は夏希さんに背を向ける形に座った。何があるのだろうと思っていたら、後ろから突然、抱きしめられた。当然、僕はうるたえてしまう。

「え、あの、夏希さん？」

「ごめん、少しでいいの。少しでいいから、悠斗くんの背中、借りるね」

でも、と僕は言いかけて止めた。なぜなら夏希さんの、声が…体が

震えていたからだ。おそらく必死に涙を零しまいところえているだろう。そう思い、僕は黙って夏希さんに背中を貸した。

「……」

「ありがとう、もう大丈夫だよ」

夏希さんが離れた。背中の中の温もりが少しずつ抜けていくのがなぜか少し寂しかった。

「あの…余計なことかもしれないですけど、これからどうするんですか？」

「そうね…、とりあえず仕事はこのまま続けるつもり。ソフィア家には恩があるから、あと、悠斗くんにもね」

「いえ、僕は気にしなくてもいいです。僕が勝手にやったことなので」

「そうね、なら、悠斗くんが勝手に私を助けたんだから責任を取ってもらおうかしら」

「え、」

責任ってなんだろう、夏希さんはニヤニヤしてこっちを見てる。僕はそんなに大金は持ってないし……、ああ、でも……

「……これからも悠斗くんに甘えさせて。私はどうしても弱いのだから……」

「…そんなことでいいんですか？」

「そんなことって、とても図々しい事だと思うんだけど…」

「そんなのは当たり前のことです。でもよかった、大金を要求されたらどうしようかと思いました」

「……あははははははっ。どこまでも真面目なのね」

「なんで笑うんですか！？ おかしなこと言いました？」

「だって、大金って、あはは、あはははははっ」

夏希さんはベットの上でずっと笑っていた。それを見て、不思議に思いながらも僕は安心していった。元気になったみたいだ。

「もう、笑いすぎですよ」

「あはは、ごめんね。面白いなーって思ってた」

「じゃあ、そろそろ僕は部屋戻りますよ。夏希さんはそのベット使っていていいですから」

「え、じゃあ悠斗くんはどこで寝るの？」

「僕はソファで寝ます。あ、用事があったら呼んでください」

僕が使ってたベットは今は夏希さんが使ってるんだからしょうがないだろう。僕はロビーにあるソファで寝ると決めていた。別の部屋に翼が移ったけど、その部屋にはベットは一つしかなかった。

「ちょっと待って、メイドのわたしがベットを使って、お客様にはソファーなんてできるわけじゃないじゃない！」

「いや、これはしょうがない事だと思いますけど……」

「ダメに決まってるでしょう！ そうだなあ……どうしよう」

「僕のことはホントに気にしないでいいですから」

「じゃあ、一緒に寝ようか！ それなら、悠斗くんがソファーで寝ることもないし、用事があるとき呼びやすいし」

「ええ！？ そ、そんなのダメですよ！」

「わたしと寝るのはやなの？」

「いや、あの、イヤ……ではないんですけど……」

「じゃあ、決定！ ほら、もう寝よう」

「待って下さい、やっぱ、いろいろまずい気がしますよ」

「お願い、甘えさせてもらっていいんでしょう？」

「うう……、わかりました」

「うん、ありがとう。悠斗くん」

こうして、僕は夏希さんと同じベットで寝ることに。うう、心臓が

バクバク鳴ってるの聞こえたりしてないかな。そもそも、こんな状況で寝れるわけじゃないじゃあないか。そう思っていたが、案外あっさりと僕は眠ってしまった。

「ふふ、もう寝ちゃったか…」

わたしは隣で寝ている子を見て呟いた。おそらく、わたしよりも小さくて、女の子のような可愛い顔をしている子、だが、わたしの命の恩人だ。わたしが生きることを諦めようとしたとき、間違えた道に進もうとしたわたしを正しい道に歩ませてくれた。この子には一生をかけても返せない借りができてしまった。

「ありがとう……」

わたしはこの子のように、明るく前を見てこれからも生きて行きたいと思った。そして、隣にこの子が…悠斗くんがいてくれれば……。そこでわたしの意識は途切れ、眠りについた。

第26話

「うーん、もう朝か…」

カーテンの隙間から差し込む朝日で目が覚めた。目が覚めたけど、なぜか体が動かない。右腕ががちりと誰かが抱きついていてみるみた。え…、抱きついてる？ まさか…、僕は慌てて右を向いた。

「（——！？）」

僕の隣ではルイスの専属メイドの夏希さんが寝ていた。僕の右手を抱きしめながらスヤスヤ寝てる。そういえば、昨日僕はロビーのソファで寝ようと思ったたら夏希さんに止められて一緒のベッドで寝ることになったんだ。

「——！——！」

寝ているので大きな声は出せない。しかし、完全に焦ってしまったている僕。ああ、もう！ 何でこの人は起きないんだ。さっきから腕にやわらかいものが当たってるって。ど、どうしよう、こんなところ誰かに見られたら……。

「佐倉！、体の調子は…どう…」

「えっと、ルイス…、おはよう？」

ああ、とてもいいタイミングでルイスが入ってきた。ルイス固まっちゃったよ、めちゃくちゃ怒ってる！

「あの、ルイス、これは違うんだよ…」

「ゆうーとー！」

「うわ、違うんだって、落ち着いて」

「これが落ち着いていられるわけないでしょ！ このバカーー！」
「バチーン！ ルイスのビンタが僕の頬を襲った。ああ、痛い……。眠気と共に僕は吹っ飛ばされた。」

「ちょっと、佐倉！ 起きなさい、そして事情を説明しなさい！」

「…ふあ。あれ、お嬢様、おはようございます。早いですね」

「佐倉！ どうして、隣で悠斗が寝てるの！ 説明しなさい！」

「ルイス、佐倉さんが悪いわけじゃないよ！ 僕が……」

「悠斗は黙ってて！」

「はい……」

怖い…、ルイスがめちゃくちゃ怖い。バイト先の店長より怖い…。

「はい、わたしが悠斗様に頼みました。お客様である悠斗様をソファで寝かせるわけにもいきませんでしたので」

「…だとしても一緒に寝ることはなかったんじゃないの」

「他にもうベットは空いてませんし、これしか方法がありませんでした。それに昨日は誰かと一緒にいたかったので…」

「あ…」

「申し訳ありません」

「……わかった。ならしやうがないわね。……佐倉と二人で話した
いから悠斗は席をはずしてくれる？」

「わかった」

僕は部屋を出た。それにしても二人つきりで話ってなんだろう。怒られてなけりやいいんだけど……。朝食までまだ時間があるから外を散歩でもしてようかな。僕は外を出て海の方へ向かった。

「さて、佐倉、体の調子はどう？」

「大丈夫です。ご心配をおかけしました」

「いいわ。…あなた、もしかして悠斗のこと好きになった？」

「え？ いや、あの、わたしは…」

「わかりやすいわね…。そっかー、佐倉もなのね…」

「えっと、もしかしてお嬢様も？」

「そうだけど、彩音も桐原さんもよ。ホント悠斗は…」

「ちょっと待って下さい。みなさんそうなんですか!？」

「そうよ。だからみんなで遊ぼうって話になったのよ。早速、みんなに話しとこうかしら」

「待って下さい。でしたら、わたしは……」

「諦めるとか言い出すの？」

「……はい」

「あのね、なんでそこで諦めるの？ みんなに気を使って？ それとも、自分の立場はメイドだから？ だったらそんなのは関係ないわよ。「あなたは私のメイドだから諦めなさい」なんて言わない。好きになったならそれはしょうがないじゃない。そこに立場は関係ないし、私もみんなも負けるつもりはないわよ」

「でも……」

「悠斗は佐倉を受け止めてくれたんでしょう。悠斗に甘えたんでしょう。だったら、逆に、悠斗を受け止めたいでしょう？ 甘えさせたいでしょう？ それとも、もう悠斗はどうでもよくなった？」

「そんなことあるわけないです！ ……諦めたくないです」

「それでいいのよ。簡単に諦められるわけないもんね。大丈夫、みんな呆れるだけよ。「またか……」って」

「はい……。ありがとうございます、お嬢様」

「ライバルね。私は負けないからね」

「はい、わたしも負けません」

「ふふ、佐倉はそのまま休んでいいわよ。悠斗が朝食を作ってくれるみたいだから。……その前に悠斗に謝っておかないと」

「都住様が外に出て行くのを見えましたよ」

「ありがとう、行ってくる」

「いつてらっしゃいませ」

私は悠斗を探しに外に出た。ふう…、それにしても佐倉も悠斗に惚れてしまったか…。相変わらずの天然ジゴロだ、本人は全く気付いてないみたいだが。それにしても悠斗はいつまで悩んでるつもりだろう。そろそろ答えを出してもいいと思うのに、悠斗は全然応えはくれない。もしかしてまったく考えてないのだろうか。

「だとしたら許せない……」

「なにが許せないの？」

「ふにゃ！？ ゆ、悠斗」

「どうしたの？ 難しそうな顔して。悩み事？」

「まあね。悠斗はなんか寂しそうな顔してるけど」

「そんなことないよ……。それより、佐倉さんはまだ調子悪そうだ」

った？」

「うっん、もう大丈夫そうよ。今日は1日休ませるつもり。食事の準備は悠斗にお願いしていい？」

「もちろん。彩音と七海さんは帰るんだよね。僕も帰る準備はしておかないと」

「あの、悠斗。さっきはごめんなさい。いきなり叩いたりして…」

「あ、ああ、大丈夫だよ。気にしないで。僕の方こそ誤解させるようなこととしてごめん」

「いえ、私が勝手に早とちりしたのが悪いのよ。ごめん」

「でも、その原因は僕だからルイスは悪くないよ。だから…」

「……あは」

「……ははっ」

「「あはははははははっ」「」

「ずっとお互い謝っててもきりがないわね」

「そうだね。そろそろ朝食の準備しようかな。ルイスは食べたいものがある？」

「あ、それならハムエッグがいいわ。トーストとコーヒーで」

「了解。コテージ戻ろうか」

「あ、待ってよ！」

悠斗が前を歩いて行く。私よりも背が低いはずなのにその背中は大きく見えた。…やっぱり、悠斗といると楽しいな。悔しいけど、自分で思ってるより私の中で悠斗は大切な存在だ。でも、悠斗はどう考えてるんだろう？ 私はまだ、ただの友達なのだろうか。どうなの悠斗？ 苦しいよ、もう待ってるのはヤダよ、答えて…。そう心の中で訴えても声に出すことはできなかった。

第27話

「ふう、楽しかったな」

海から帰って次の日。僕は海でのことを振り返った。みんなで海で遊んで、まさかの女装をさせられて、夏希さんのこともいろいろあった。

「ところで、なんで僕はここにいるんでしょう?」

「そりゃあ、私が呼んだからだよ」

そう、今僕がいるところはルイスの屋敷の中だ。テーブルの正面にはルイスのお父さん、ユリウスさんが座っている。執事によってカップに紅茶が注がれる。

「夏希くんがお世話になったと聞いたからね。お礼のつもりさ」

「わざわざ、ありがとうございます」

「いや、礼を言うのはこっちだ。君のおかげで夏希くんは助かったんだ。感謝している」

「いえ、大したことはしてませんよ。ただ、自分の考えをぶつけてただけですから」

「そのおかげで、夏希くんが救われたのは間違いないんだ。ありがとう」

「……はい」

「写真をルイスから見せてもらったよ。なかなか、メイド服も似あつてんじゃないか」

「ええ！？ 見たんですか!？」

「嬉しそうに見せてくれたんでね。うむ、個人的には制服の方がよかった」

「どうでもいいですよ……。そういえばルイスは居ないんですね」

「ルイスは会議があるからって夏希くんと出かけてしまったよ」

「夏希さんと？ そうなんですか」

「ああ。よし、今日は最高のディナーを準備するから遠慮しないで楽しんでいてくれ！」

「はい、ありがとうございます」

その時、ルイスは夏希と共に車に乗っていた。そして、車はある人の家の前で止まった。ルイスと夏希は車を降りて、家のチャイムを鳴らす。

「あ、来た来た」

「「お邪魔します」」

そこは彩音の家だった。彩音の部屋に案内されて、ルイスと佐倉さんも来た。「よし…」と、俺は覚悟を決めて話し始める。

「さて、よく集まってくれた。これからちよつと話を聞いてほしい」

「ねえ、何の話をするの？ とりあえず、「大切な話があるから集まってほしい」としか聞いてないんだけど。あとなんで悠斗はいないの？」

「「「うん、うん」「」」

「大切な話は悠斗についてだからだ。そして、悠斗には聞かれない話なんだ」

「「「「……」「」」」

「そうだな…、これから話すことは正直いい話ではない。ショックを受けるかもしれないし、悠斗このことがわからなくなってしまう。だから、覚悟して聞いてほしい」

「どうゆつこと？」

「そうです。よくわかりませんよ」

「そうだな…、悠斗の秘密にしてることを教えようと思う」

「それがショックかもしれないってこと？」

「そうだ、もしかしたら悠斗を嫌いになるかもしれない」

みんな黙ってしまった。「無理もないか」と思った。突然、悠斗のことを話し始めたんだ。でも…もう俺では出来ないことなんだ。

「正直、最近のお前達は悠斗に仲良くしている。それで悠斗も変わり始めてる。けど、あと少しきつかけが足りないんだ。もう俺では出来ない、だからここにいて誰かに頼みたい。……悠斗を助けてやってほしい」

「…私は残るわ」

ルイスが声を上げた。周りは戸惑っている。

「いいのか？」

「私は悠斗が好き…、この気持ちは本物だから。私が悠斗を助けた」

「では、わたしも残ります」

続けて佐倉さんが名乗り出た。正直、この人は帰ると思っていた。

「あなたは悠斗と出会ってまだ1週間も経ってないですね。悠斗のことは全然知らないはずじゃ…」

「それでも、悠斗くんはわたしを助けてくれたんだから、今度はわたしが助ける番です」

「私も残ります！」

「あ、あたしだつて」

結局、全員名乗り出た。…ありがたい。悠斗、お前は本当にいい仲間と出会えたんだぞ。

「よし、わかった。じゃあ、話そう。悠斗の秘密だけど…、悠斗は本当は誰も信じていないんだ。あいつは昔にいじめられたことがあって、それ以来誰も信じようとしなくなつたんだ」

「そんな…、あの悠斗が？」

「あたしはそんな話聞いてないわよ！」

「彩音には悠斗が話さなかったからな。それから、あいつは仮面をつけて本心を隠して道化を演じてきた。あいつはお前たちを助けたけどそれ以上に自分を助けてもらいたがつてるんだ」

「待って下さい、そんなのわからないじゃないですか！」

「そうよ、悠斗はあんなに強いじゃない」

「じゃあ、誰かあいつから弱音を吐いたのを聞いたか？ 誰かあいつが泣いてるのを見たか？」

「……」

「あいつは誰にも弱音を吐かないし、いつも一人で泣いてるんだよ。…所詮、自分は一人なんだって思ってるんだよ。ホントは誰か構ってほしいって思ってるくせに、誰よりも甘えん坊のくせに諦めてるんだよ。あのバカは」

「なんで話してくれないのよ…」

「あとな、あいつ実は女子は苦手なんだ。昔に女関係でよくないことがあつてな、それ以来、女子はよくわからないって言ってるんだ」

「昔の女関係ってなんですか？」

「それは本人から聞いてくれ。だから、特に女子は信用してないんだ。と言っても、俺にさえあんまりあいつは本音を言わないからわからないんだけどな」

「じゃあ、私たちじゃダメじゃないの？」

「いや、諦めるならそれでもいい。ただな、あいつは苦しんでるんだ。当たり前だよな、誰にも頼らずにずっと一人でいようとしてるんだから苦しいに決まってる。だからな、誰でもいい、あいつを支えてやってほしい」

「翼はどうしてそこまでするの？ 悠斗は親友だから？」

「それもある。けど、本当はあいつの両親に任せられたんだ。あいつの両親が亡くなる前に「悠斗はとても弱い子だから翼君、支えてやってくれ」ってな。だから、俺は今まで悠斗を支えてきた。……けど、俺は支える程度しかできないんだ」

「やっぱり、信じられない。悠斗はいつだって優しくて、心の強い人だったのに…」

「そんなことないんだよ。あいつは誰よりも弱いんだ。なんなら、

明日、悠斗が一人で出かけるからこつそり後をつけるといい。少しは信じてもらえるかもしれない」

「明日なにかあるんですか？」

「それは行けばわかる。俺が言えるのはここまでだ。…あいつをよろしく頼む」

それだけ言っただけ俺は部屋を出た。俺ができるのはこれくらいだ。あとはあいつらがなんとかしてくれるだろう。上手くいったとしても、ダメだったとしても。それが今の悠斗には必要だ……。

第28話

「なにも集まって勉強会することもなかったんじゃない？」

今は街にある図書館に僕、翼、彩音、ルイス、七海さん、夏希さんの六人がいた。突然翼が「明日、図書館で勉強会だから1時に集合な！」と電話してきて急に決まった。

「みんなでやれば早く終わるだろうー。桐原さんだってわからないところ聞けるし」

「そうですよー、夏休みの宿題なんて早く終わらせて、もっと遊ばないと」

「私たちがわからないところは佐倉に聞けばわかるし」

「はい、お任せ下さい」

そうしてみんなで勉強会だ。まあ、早めに終わらせるに越したことはないしっか。僕はノートに計算式を書きこんでいく。

「都住先輩、ここはどうなるんですか？」

「どれ、ああ、ここはね、この計算式を入れて…」

「悠斗、悠斗、ここ終わった？ わかんないんだけど」

「それは、この法則を使えばいいんだよ」

「都住様、わからないところなどはありますか？」

「あ、今は大丈夫です。ありがとうございます」

「悠斗ー、写させてー」

「翼はもう少し自分でやろうよ！」

「悠斗、しいー」

「あ、彩音ごめん」

図書館なのであまりうるさくは出来ない。みんな必要以上はしゃべらずもくもくと宿題をかたずけていった。そして、集中したおかげか、思ったより早く終わった。

「このあとさ、私の家に来ない？　おいしいお菓子があるんだ」

「わたしも紅茶を用意します」

「いいですねー、私は大丈夫です」

「あたしも大丈夫」

「俺はパス。ミーティングがあるんだ」

「僕もこのあと予定が…」

「悠斗の予定って何？　バイト？」

「いや、バイトじゃないんだけど…」

「わたしの淹れた紅茶を飲んでくれないんですか…」

「いや、あの嬉しいんですけど…今日はちょっと」

「悠斗はどうせ暇でしょ」

「彩音は時々ひどいよね」

「じゃあ、バイトでもなければなんなのよ？」

「えっと、その…」

「「「じー」」」

「あ、ああ、そろそろ行かないと！　じゃ、お疲れ様ー」

「「「あ、ちよつと！」」」

「じゃ、俺も帰るわ。お疲れー」

「「「……」」」

僕は逃げるようにして図書館から出た。いや、実際逃げてきたんだけどさ。今日は何があっても行かなきゃならない場所があるんだ。

「どう思っ、佐倉？」

「何か隠してるとしかわかりませんね」

「私たちに言えない事ってことですか？」

「悠斗が秘密にしたがるなんて、あんまりないはずなのに…」

四人で話し合う。しかし、誰も答えはわからない。そして、四人で悠斗の後をつけることになった。

「さて、そろそろ出かけようかな」

時間は夕方の時間帯。夕日がそろそろキレイになってくるだろう。今日はバイトも休みだ、今日は大切な日だから。僕は花束を持って出かける。

「あ、都住先輩出てきましたよ。なんか花束持ってますけど…」

「え、なんで花束なんか持って行くの？ まさか、これから誰かとデートとか!？」

「でも、こんな時間からデートはないでしょ。あ、見失っちゃう」

「お嬢様、もう少し声のボリュームをおさげ下さい。気づかれてしまいます」

「ほら、先輩達！ 行きますよ」

悠斗の後をルイス、彩音、七海、夏希の四人が付けて行く。付けて

行く理由は昨日上条翼が「ついて行けば悠斗が弱いということがわかる」と言っていたからだ。ここにいる誰もが、悠斗は優しく、誰よりも強い心を持っていると信じていた。みんな悠斗に助けられたからだ。

「こつちの方向はなんにもなかったはずですよね」

「何するつもりなのかしら？」

「誰かと待ち合わせをしているのかもしれない」

「あたしたちじゃない誰かってこと？」

「「……」」

「そうだったら許せないです……」

「そうね、その時はどうしてやろうかしら……」

「お嬢様、暴力はいけません」

「その時はキツーンイお説教が必要ね……」

そんなことも知らずに悠斗はどんどん歩いて行く、時々時間を気にしているのか腕の時計を確認している。そして、角を曲がって行った。

「都住先輩、歩くの早いですね」

「急いでるのかしら、時計を何度も見てるし」

「遅刻しないように確認しているのでは？」

「……あの角って、たしか……」

「どうしたんですか、桜沢先輩？」

「あの角は……悠斗の両親が事故にあった場所……」

「え……じゃあ、あの花束って……」

四人は急いで角を曲がった。悠斗は立ち止って花束の半分を道路のところに置いていた。道路には未だに車の急ブレーキの跡が残っていた。悠斗はしゃがんで両手を合わせている。

「今日はたしか交通事故から5ヶ月くらいのはず……」

「「「……」」」

悠斗は立ち上がり、別の場所へと移動し始めた。その後を四人で付けて行く。その顔に誰も笑顔はなかった。

「毎月、一人で来てたのかな……」

「そうかもしれないですね……。じゃあ、次に行く場所は……」

「そうだね、方向的にも間違いないわ」

悠斗が次に行った場所はお墓だった。一つのお墓の前に残りの花束を置いた。悠斗がお墓に向かって何かをしゃべる。四人は少しでも

聞こえるように出来るだけ近づいた。

「父さん、母さん、元気ですか？ 僕は今、夏休みなんだ。先週はクラス友達と海に行ってきたんだよ。別荘を持ってる人がいて招待してくれたんだ。楽しかったよ、いろんなことがあったけど、僕は楽しかった。でも…」

「でも僕は…ぐすつ、父さんと…母さんと海…うあ、行きたかった…。ああ、父さんと泳ぎたかったよ…、母さんとボート乗ってたよお…っ！ うああああ、ああああああ…」

悠斗はボロボロに泣いていた。そこには普段の都住悠斗は居なかった。子供のように泣きじゃくる、弱々しい都住悠斗だった。誰もが、今すぐ飛び出して、悠斗を抱きしめたかった。一緒に泣きたかった。でも、誰も行かなかった。行けなかった。行っても、悠斗は強がって泣くのを我慢するだろう。

「あああああ……、うあああああー」

悠斗が嗚咽を漏らす。四人とも黙って俯いたままだ。悠斗のことを誰も何もわかってなかった、自分達ばかり舞い上がっていたことに罪悪感を覚えた。上条翼が言ったとおり、悠斗も強くはなかった。弱い自分を隠していた。それを周りには絶対に見せなかっただけだった。

そして、悠斗は涙を拭いて立ちあがり振り返らずに去って行った。私たち四人は黙ったまま立ちつくした、誰も何も言えなかった。

第29話（前書き）

文化祭で忙しかったです・・・

第29話

「さて、今日はどうしようか…」

夏休みも中盤、しかし、することがない。バイトは夕方からだし、宿題は終わってるし、やらなければならないこともない。ちなみに、今は午前10時だ。

「どうしようかな……、とりあえず掃除と洗濯でもしようかな」

そう決めて、僕は洗濯物をまとめ始めた。その時、「コン、コン」と玄関の扉から音がした。誰だろう？　僕は玄関に向かう。

「はい。あれ、夏希さんじゃないですか。どうして家に？」

「こんにちは、悠斗くん。お昼作ってあげようと思って。おじやましていいかな？」

「はい、どうぞ」

夏希さんはいつものメイド服ではなく、私服で両手に買い物袋を提げて入ってきた。部屋にあまり女の人を入れないので少しドキドキする。

「へえ？、キレイにしてあるんだね。男の子の部屋ってもっとごちゃちやりしてるのかと思ってた」

「そうゆうわけでもないですよ。あ、適当に座って下さい。今日はルイスの付き添いはしなくてよかったんですか？」

「今日はお休みにしてもらった。私だっただけに休まないと疲れちゃうからね。今日は何かするつもりだったの？」

「いえ、特にないんで掃除と洗濯でもバイトの前にしておこうと思つて。今日は6時からバイトです」

「掃除と洗濯ならやってあげるよ。悠斗くんは休んでて！」

「いや、そんなわけにもいきらないですよ。夏希さんこそ、今日は休みなんですからのんびりしてて下さい」

「いいの、わたしがやりたいの。それに、悠斗くんが掃除とか洗濯してたらわたしは暇でしょ。いいから任せて」

「じゃ、じゃあ、洗濯は僕がやるんで、掃除をお願いしてもいいですか？」

「任せて！」

夏希さんは箒を奪うと、丁寧に床を掃き始めた。まあ、ここは任せて僕は洗濯を終わらせちゃおう。僕は洗濯物をまとめて洗濯機に放り込んだ。

「夏希さん、終わりました？ 狭い部屋だから早く終わると思うんですけど……」

「悠斗くん…、これ、両親？」

夏希さんは机の上に置いてある写真たてに入った写真を見ていた。

そこには三人で笑いながら並んで撮られていた。

「…はい。そうですね」

「二人とも優しそうだね…。どちらかというと、お母さん似？」

「そうですね、昔から僕は母親にだって言われてきましたから。性格は父親だって言っていましたけど」

「性格はお父さんなんだ。あはは、なんとなく想像できるなあ。あ、そろそろお昼にしようか」

「そうですね、じゃあ、お願いします」

「台所借りるね」

エプロンをつけて夏希さんが台所に立つ。僕はその後ろ姿を見て、母さんのことを思い出した。思わず涙がこみ上げてくる。

「悠斗くんは味付けは薄い方が好き？ それともこい方がいい？
どうしたの、悠斗くん？」

「え、あの、薄味で」

僕はとつさに背を向けた。泣きそうな顔なんて、かつこ悪くて見せられない。

「これでよしと、はい、できたよ。運ぶの手伝ってもらっていい？」

「はい。食器はどれでもいいので使ってください」

テーブルには、ほかほかのごはんとお味噌汁と肉じゃがが置かれていて、とてもいい匂いがする。

「じゃあ、いただきます」

「どうぞ、召し上げ」

早速、僕は肉じゃがに箸を伸ばしてじゃがいもを口に運んだ。心配そうに夏希さんが僕を見ている。

「うん、うまいですよ！ この味付けは僕好きです」

「そ、そうかな。よかった、どんどん食べてね」

あっという間に昼食を食べ終え、食器などをかたずける。そういえば、誰かの手料理を食べるのも、誰かと昼食を食べるのも久しぶりだった。

「ねえ、午後暇ならさ、買い物に付き合ってくれるかな？」

「いいですよ。駅周辺ですか？」

「そうだね。じゃあ、行こう」

夏希さんと二人で外へ出る。駅近くのデパートまではそんなに遠くはなかった。

「それで何を買うんですか？」

「服とか雑貨とかかな。そうだ、悠斗くんもなんかアクセサリーとか買ってみたら？ ネットレスとかさ」

「そんなの僕には似合わないですよ」

「大丈夫だって、ほら、見に行こう」

「うわ、ちょっと、引つ張らないでくださいよ！」

夏希さんに腕を引つ張られながら、デパートの中へと入って行く。周りの人の視線が厳しかった…。夏希さんは雑貨のお店にまっすぐ入って行った。そこでいろいろ見て行く。

「これとかどうかな？ こっちでもいいかも」

夏希さんがあれこれ手に取って悩んでいく。僕は、それを隣で、女の子ってホントにお買いものって好きだよね…、と思いながら眺めていた。

「悠斗くんはどんなのがいい？」

「よくわかんないですけど…、僕はシンプルなのが好きですね」

「そっか…、じゃあこれとかどうかな？」

夏希さんはそう言って、シンプルなプレートの付いたネットレスを選んだ。

「いいと思います。夏希さんに似あってますよ」

「そうかな？　じゃあ、買おっと」

そついうと、夏希さんはネックレスを2つ持ってレジに向かった。お会計を済まして戻ってくる。そして、袋からネックレスを取り出して僕に渡した。

「これ、付けてくれる？　私不器用だから付けられなくて…」

「いいですよ」

僕は手渡されたネックレスを夏希さんの首につける。ふわりと、いい香りがしてドキドキした。

「ありがとう。そして、こっちが悠斗くんのやつだから付けてあげるね」

「僕のもなんて、いいんですか？」

「いいんだよ！　ほら、後ろ向いて！」

僕は夏希さんにネックレスを付けてもらう。そして、正面から夏希さんが僕を見て、うん、うん、と頷く。

「似あってる！　大切にしてね。私も大切にするから」

「はい、ありがとうございます」

その後も、夏希さんと服を見にいたり、雑貨を探してみたりした。途中、休憩しながらデパートを歩き回った。

第29話（後書き）

感想待ってますので、お願いいたします！

第30話（前書き）

30話になりました。長かったなあ…。

第30話

「夏休みは終わってしまった！」

翼が僕の隣で叫ぶ。今は学校が始まり、自分の席に座っている。

「あんまり遊べなかったわね」

隣の席のルイスが呟く。なんだかんだで、それぞれに予定があり、あまり「集まって遊ぼう！」というわけにはいかなかった。

「しかも、学校始つてすぐにテストってどうなのよ……」

いつの間にか隣にいる彩音がため息とともに吐き出す。そうなのだ、学校が始まって次の日にはテストが待っていた。みんな、休みボケが抜けておらずまいちやる気が出ない。

「そりゃあ、学生の本分は勉強だからね。しょうがないよ」

「悠斗は勉強できるしいいかもしれないけど、あたしはこれで赤点があつたら部活をさせてもらえないのよ！」

「彩音は毎回赤点ギリギリだからな。今回はヤバいんじゃないのか？」

「くっ…、少しでも部活に専念したいのに…。課題なんて最悪よ！テストなんて悪魔よ！」

「そんな大げさな…。でも、課題が出るのはヤダね」

「そうね、遊ぶ時間が奪われるし。今日にでも私は佐倉に勉強を教えてもらおうかしら」

「ゆ、悠斗！ 今日であたしの家で勉強会にしない！？ というか、勉強教えて！」

「うーん、今日はバイトがあるからあんまり時間ないよ？」

「今日はどうせ始業式だけだから午前で帰れるでしょ。午後たっぷりできる！」

「そういえばそうだね。なら僕はいいよ。他の人は？」

「俺はパスだ。部活がある」

「ルイスは佐倉さんに教えてもらうのよね。じゃあ他はなしじゃない？」

「ちょっと待った！ じゃあ、悠斗と彩音の二人で勉強するってこと！？」

「そうなるのかな」

「……そういえば、今日は佐倉は休みでいないんだっただ」

「嘘でしょ！ 明らか、今決めたでしょ！」

「違うわよ！ 今、思い出したのよ」

二人でぎゃーぎゃーと口論を始める。この二人はホントに仲がいいなあ……。隣で翼はケタケタ笑ってるし、ああ、平和だなー。でも、そろそろ止めないと。

「ほら、そんなに喧嘩しないで。三人でやればいいでしょ。ちゃんと教えるから」

そう言うと二人はこちらを見て、呆れた顔をしてため息をついた。

「まあ、これが悠斗だもんね」

「ホント、なんか悔しいわ」

そして、それぞれ自分の席に帰って行ってしまった。僕はなんのこともだろうと、頭をかしげてみたけど答えは出てこなかった。

「それじゃあ、始めましょうか！」

はい、彩音の家に移動しました。小さい頃からよく来ていたが中はまったく変わっておらず、最低限の物しか置いていない。本人いわく「ごちゃごちゃするからこれでいい」とのこと。

「さて、何から始めようか？ 苦手な教科は？」

「英語」「数学」

「えっと……、彩音が英語で、ルイスは数学ね。わからないところが

あつたら教えるから言つて」

「悠斗、悠斗。ここの計算はどうやるの？」

「ここは、この計算式を使って……」

「悠斗！ ここの訳がわかんないんだけど！」

「ここは過去形だから、くでした。つて感じにして……」

「悠斗、ここは？」

「ここはこの計算式で……」

すぐ隣までルイスが近づいてくる。一瞬、ふわっと甘い匂いがした。香水かなんかだろうか、僕はドキッとする。

「ちょっと、ルイス！ 近づき過ぎでしょ！ 悠斗もデレっとすんなー！」

「べ、別に、デレっとなんてしてないよ」

「でも、顔赤いよ。かーわいい」

「あー、もー、ルイスはあつちで本でも読んでなさいよー！」

彩音が指さす所には、雑誌らしきものが積み重なっていた。それを無視して、ルイスは机の棚に収まっていた分厚い本を見つける。

「じゃあ、こつちでも見ようかな」

「あ、それ、中学校の卒業文集？」

「あー、それはダメ！」

「いいじゃない。少し見るだけよ」

彩音の言葉も虚しく、あっさりと本を開く。僕と彩音と翼が同じ学校で同じクラスだったからすぐにわかるだろう。

「わー、小さい。これ、悠斗？」

「……どうせ小さかったよ」

「この時の悠斗ってクラスで一番小さくなかった」

「小さかったよ！」

「まあまあ、そんな怒らないで。かわいいからOKよ」

「うう……もういいよ」

「彩音は……、もしかして…これ？」

「あー、だからダメだってー」

「ぷっ、あはははー。こ、これが、彩音…」

僕も見る。そこに写っていた彩音は、前髪がパツンでメガネをかけていて、いかにもクラス委員長って感じに見える。そういえば、

こんな感じだったな……。

「あははー。ダ、ダメ、可愛すぎ……」

「だったら、笑うなー！ この時はオシャレなんて考えてなかったんだからー！」

結局、その後も出てきたアルバムを見ながらルイスは笑って、彩音はぐったりしていた。自分の小さい頃の写真を久しぶりに見たが…、身長は伸びてるよ…ね…。あまり気にしないでおいた。

あ、あと、次の日のテストは彩音とルイスは赤点だった。原因はもちろん、アルバムを見て笑っていたことだ。

第31話（前書き）

遅くなって申し訳ないです！もっと早く次を出せるように努力します。

第31話

「さて、今日は部活に出ようかな」

夏休み前に七海さんと約束したから行かないわけにはいかない。今日はバイトもないし、ラケットも持ってきたから行こう。そう決めて、僕は卓球場へと向かった。

「あ、都住先輩だー！ 来てくれたんですねー」

「今日はバイトも何も無いからね。早速やろうかな」

「先に先生のところに行ってきてください。来たら顔出すように言っていましたよ」

「そっか。わかった」

僕は先生の所に向かった。先生は厳しそうなお目で練習している生徒たちを見ていた。確かこの先生になってからこの卓球部は強くなってきた、今では強豪校として有名である。

「西山先生、こんにちは」

「おお、都住か…。これから部活に少しずつ出るんだって？ お前、平気なのか？」

「はい。約束してしまったので断るわけにもいきませんし…」

「まあ、お前が言うなら大丈夫か。まず、突然だがお前にはほかの生徒の練習を見てもらいたい、悪いところがあれば直してやるように。それから最後の練習試合にはお前も参加するように」

「僕がほかの練習を見るんですか！？ そんな、僕なんかが……」

「お前の実力は誰もが認めてるよ。練習指導なら俺よりもお前の方が適任くらいだ。それに…俺はタバコが吸いたい」

「校内では禁煙ですよ」

「わかってるよ。だから、わざわざ外まで出ないといけないんだろーが。俺がいない間はお前が監督だからな」

「いやいやいや、何言ってるんですか！」

「じゃ、よろしく」

「ええ！？ 本気ですか！？」

あっさりと西山先生は居なくなってしまった。西山先生は確かに指導は的確で、二年連続全国出場をさせていることもあるが、とにかく自由な人で気付いたら居なくなってたというのはいつものことだった。

「さて、練習しましょう！ 都住先輩、指導よろしくお願いしますーす！」

「……「よろしくお願いします!」「」「」

「……わかりました」

そうして、卓球部の練習が始まった。各自、練習をしていく。それを僕は見て回って、悪いところは指摘して直してもらう。この繰り返しだ。

「……だから、こんな感じでやってみて」

「なるほど、ありがとうございます!」

「君はもう少し腕の振りを……」

「はい、わかりました」

「都住先輩ー、見てもらえますか?」

「七海さん、いいよ」

七海さんがラリーを始める。うん、腕も振れてるしいい感じだ。今年の一年生はみんな上手い、これなら大会に出ても上に行けるだろう。

「うん、いい感じだよ」

「えへへ、ありがとうございます」

「じゃあ、ここで10分休憩にしよう。休憩終わったら試合形式で

練習します」

「……はい……」

僕は壁にもたれかかって座る。久しぶりだからあまり体が付いていない。もっと練習しないと。

「都住先輩！　こんなところにいたんですか！　お疲れ様です」

「七海さんもお疲れ。どうしたの？」

「どうしたって、先輩にお礼言いたくて」

「お礼？」

「はい、バイトで忙しいなかわざわざ部活に出てもらってありがとうございます。みんなも喜んでました」

「そんな、大袈裟だよ」

「まあ、一番喜んでるのは私なんですけどね」

「へ、それってどういう意味……？」

「あー！　先輩、休憩終わりですよ。さ、練習しましょう、練習」

「わ、ホントだ」

僕は練習に戻る。先生が戻ってきていたので、先生が指導をする。それにしても、さっきの七海さんが言ったのはどういう意味だった

んだろう？ 七海さんの顔が赤くなってることしかわからなかった。

「……ありがとうございます！」「……」

今日の練習も終わってみんなでかたづけをする。僕はピンポン玉を集めていると七海さんが寄ってきて話しかけてくる。

「先輩、このあと暇ですか？ よかったらこのあと私ちよつと買い物に行こうかと思ってるんですけど一緒に行きませんか？」

「うん、いいよ。僕も夕飯の材料買わないといけなかったから」

「それじゃあ、着替たら昇降口で待ち合わせをお願いします！」

「わかった、じゃあ後でね」

それだけ言つと、七海さんはピンポン玉を箱に戻して卓球場を出て行った。僕もかたづけ終わったし着替えないと、そう思い更衣室に入った。

「今日の晩御飯はどうしようかな……」

昨日は卵が余ってたからオムライスにして食べたのを思い出して、今日は中華がいいなあ、と考えながら一人で昇降口に立っていた。

「すみません、お待たせしました！」

小走り気味で七海さんが現れる。少し息を切らしているところを考

えると急いできたのがわかる。

「僕もさっき来たところだよ。それに考え事してたし」

「なんか悩み事ですか？」

「いや、今日の晩御飯のこと。何にしようかなーと思ってね。それより行こうか」

「はい。…やっぱり、毎日自分で作ってるんですか？」

「そうだよ。たまに、外で食べたりもするけど…やっぱり自分で作る方が安くなるし、楽しいしね」

「でも、大変じゃないですか？ 勉強して、バイトして、ご飯も自分で作って…」

「うーん、はじめは大変だったけど、もう慣れたかな。今は楽しいし」

あはは、と僕は笑いながら歩いて行く。それをどこか悲しそうに、辛そうに七海さんは見ていた。でも、すぐ明るい笑顔で僕に並んで歩く。そして、近くのデパートへと着いた。

「七海さんは何を買うの？」

「私は本を買いにです。今日新刊が出るので」

そう言っつて、一冊の小説を手にとってレジに持って行った。僕は夕食の材料を選んで買ってきた。二人とも買い物が終わわり、帰ること

にした。

第32話

「悠斗ー、今日暇？」

突然、翼が僕に聞いてきた。授業が終わって、これから「さあ、帰ろう！」ってタイミングで。

「特に何もないけど…、なんで？」

特に何もなかった。バイトは休みだし、卓球部はなんか、先生が来れないということで自主練だから今日はいいいかなー、と思って帰って本でも読もうと思ってたところだ。

「おおー、よかったな、彩音。なんかな、彩音が悠斗に料理を教えてほしいんだってさ。お前がいいならこれから彩音の家でやるぞ」

「ちょ、ちよつと翼、強引すぎよ…」

「僕はいいよ。教えるって約束してたもんね」

「お、お前ら相変わらず仲がいいね」

「うるさい！ ほら行くわよ、悠斗」

ドカドカと、音を立てて彩音が歩いて行く、遅れないように僕と翼も歩いて行く。まずは食材を買いに彩音の家の近くのスーパーによって行った。

「それで、彩音は何か作りたいものはあるの？」

「……ッ」

「え？」

「……ロールキャベツ」

「ロールキャベツか。あれ、確か悠斗の好物じゃなかったっけ？」

「そうだよ、ロールキャベツは好きだね。じゃあ、必要な食材を探そうか」

「……バカ」

「……なんで？」

「あー、俺は入口のベンチで待ってるから。帰る時教えて」

「わかった。行こう、彩音」

「う、うん」

僕はカゴをカートに乗せて押していく、隣に並ぶように彩音がついて歩く。まずは野菜からかな、それからお肉と見て回って行く。そして、必要なものを揃えてレジに通して行く。大きなビニール袋一つにまとまったがとても重そうである。ここは男である僕が持つべきであろう。

「よっ……と、よし、行こうか」

「重いでしょ、あたしが持つわよ」

「大丈夫だよ、これくらい」

「…腕、プルプルしてるけど」

「ダイジョウブだよ」

「じゃ、じゃあ……こうすれば」

彩音がそっとビニール袋の手を片方持った、さっきより少し軽くなる。彩音は顔を真っ赤にして俯く。

「ありがとう、彩音」

「べ、別にいいわよ…」

一つのビニール袋を二人で持ちながら翼を呼びに行き、そのまま彩音の家に向かった。僕は歩きながら彩音と今日の学校でのことをしゃべる。

「そういえば、数学の宿題出てるんだっけ？」

「そうだよ。プリントが一枚出てたね」

「悠斗、お願い！ あとで教えて、あたし絶対にわからない」

「教えるだけならいいけど、丸写しとかはダメだよ。彩音は目を離すすぐに写すんだから」

「わ、わかってるわよ!」

「……」

「どうしたの翼? さっきからずっと黙ってるけど…」

「…いや、なんでもない」

「?」

そうして、彩音の家に到着。家には誰も居らず、彩音に聞いてみると「この時間はどっちも仕事でいない」と返ってきた。

「それじゃあ、始めようか。えっと、必要なはこれだけかな」

必要そうなものを揃えて彩音と台所に立つ。二人で台所に立つと少し狭い。翼はというと「邪魔しちや悪いし(いろんな意味で)、できたら教えて」と言って彩音の部屋でのんびりしてる。

「じゃあ、まずはキャベツを茹でて……」

30分後……

「」「……」「」

鍋の中には真黒になってしまったロールキャベツがゴロゴロしていた。原因は彩音が「火を強くすれば時間を短縮できるかも」と言いながら火を強くしてしまったことだろう。

「だからダメだって言ったのに…」

「う、うるさいわね！　どんな感じかはわかったから、今度は一人でやってみるから悠斗は部屋に戻ってて！」

「でも、それじゃあ…」

「いいの！」

結局僕は彩音の部屋に追いやられてしまった。部屋には翼が一人で数学の宿題のプリントと格闘していた。翼ならあっさり終わらせてしまふのだろうけど。

「ありや、どうした？　彩音は？」

「一回失敗して、今度は一人でやるから部屋に戻ってろって追い出された」

「ははっ、そうか。まあ、宿題でも終わらせて待つてようぜ」

「また失敗しなければいいんだけど…」

「彩音が一人でやるって言ったんだろ。だったらやらせてやるんじゃないか。……それに一人でやらないと意味がないからな」

「…なんで？」

「…お前は本当に大物だなあ」

「？」

翼はわけのわからないことを言い、「気にすんな」と言ってプリントとの格闘に戻ってしまった。しょうがないので、僕もプリントを取り出し計算式を書きこんでいく。

30分後……

「彩音ー？ そろそろできたー？」

とつくに数学のプリントも終わって、翼も「そろそろ帰るわ」といって帰ってしまった。それなりに時間も経っているので、そろそろ出来ているだろう。

「…今用意する」

なんだかしょぼりしているのは気のせいだろうか。僕は椅子に座って待っていると、彩音はロールキャベツを乗せたお皿を持ってきて僕の前に置いた。

「…やっぱり、今まで料理なんてしたことないんだから出来るわけないよね…。せっかく教えてくれたのにごめん…」

申し訳なさそうに言って差し出したロールキャベツはいい匂いをしていたが形がぐちゃぐちゃになってしまっていた。少し黒くなっているところもある。

「いただきます」

僕は箸を持ってロールキャベツであろう物体を口に運ぶ。それを彩音は心配そうな顔で見ている。

「む、無理して食べなくてもいいよ…っ。あたしが全部食べるから…。ぐすっ…」

「…おいしい」

「う、うそでしょ。コゲたりしてるんだし…」

「でも、おいしいよ。彩音が一生懸命作ってくれたんだもん」

「で、でも…」

「彩音、僕だって最初から料理ができたわけじゃないよ。最初はコガしてばっかだったし、ぐちゃぐちゃだったよ。でもさ、彩音は一生懸命作ったんでしょ？ だったら、きつとうまく出来るよ」

「…なんの根拠もないでしょ」

「う、そうだけど…」

「やっぱりそうなんだー、いつでも悠斗はアバウトなんだから。もういいよ、料理なんてできなくても…」

「でも、僕は彩音の料理好きだよ。あつたかくて、安心する」

「……」

「彩音？」

彩音は顔を慌てて伏せた。なんか顔が赤かった気もするけどよくわからなかった。どうしたのかな？　なんか変なこと言ってたかな？

「あー、もう！　悠斗はホントはつきりしないんだから！　フオローするならもっとしっかりしなさいよ！」

そして突然立ち上がり、彩音は怒った風に言った。僕はビックリしたが、彩音が少し涙目になっているのに気がついて、可愛いと思って笑った。

「何突然笑うのよ！　もう食べないならかたずけるわよ！」

「あ、食べるから。はい、おかわり」

そう言つて彩音にお皿を差し出す、それを受取つて形の悪いロールキャベツを盛り、僕に渡す。

「…バーカ」

結局、ロールキャベツはほとんど僕が食べてしまった。彩音は呆れたような顔をしていたが少し笑っていたようにも見えた。

第33話

「はぁ、喉が痛い…」

僕は布団の中で呟いた。朝起きたら、寒気＋鼻がつまってる＋喉が痛い。3コンボ。なんとか体温計を見つけてきて測ると38.4もあった。しかたないので、翼に「風邪引いたから学校休む」とメールして布団にもぐった。

「風邪薬どこやったけ…？」

風邪を引いたのなんて小学校以来かもしれない。風邪薬が薬箱に入ってればいいけど…。探そうと思ったとたん、携帯が震えだしたので開いてみると翼からメールだった。

『学校終わったら行くから、必要なものあったら言ってくれ』

『ポカリスエットとプリンが欲しいです（*^^）ノ』

それだけ返信して、風邪薬は何か食べてからの方がいいと思ったので寝ることにした。

「んあ……」

携帯のバイブレーションで目を覚ました。確認してみると、翼からメールだった。

『授業終わって、買い物も済ませて、今外にいる。開けて、寒い』

僕は立ち上がり玄関の扉を開けた。そこには翼とルイスと彩音と七海さんと夏希さんもいた。こんなに多人数で部屋に入るのだろうか……。

「おーす、大丈夫かー？　なんかまだ眠そうだな」

「さっきまで寝てたからね。とりあえず入って」

僕は布団に戻った。そして、僕の布団を囲むようにルイス達が座る。夏希さんがお粥を作ってくれるみたいで台所を使っている。

「これ、ポカリとプリンは冷蔵庫に入れておくな」

「ああ、ごめん。ありがとう」

「それにしても、もう大丈夫そうね。突然風邪引いたって聞いてビックリしたんだから」

「ごめん、ルイス。でも、もう大丈夫だから」

「そんなこと言って治りかけが一番危ないんですからゆっくり寝て下さい」

「七海ちゃんの言う通りよ。悠斗は寝てなさい」

「…そう言いながら七海さんと彩音は何してるの？」

七海さんと彩音は周りを見ながらうつろちよろしていた。あんまり部屋の中を見られたくはないんだけどな…

「いえ、先輩の部屋初めて来たなーって思ってた」「悠斗の部屋は意外と汚れてないなーって」

「大人しくしてて下さい…」

みんなそれぞれ自由にしている。普段の僕ならすぐに部屋を出ようと促すが、今はそんな元気はないので黙っている。

「悠斗様、お粥ができました。起きれますか？」

「あ、はい。すいません、わざわざ……」

「いえ、お口に合えばいいですが…」

「いただきます。……ん、おいしいです」

「よかった。それだけ食べましたらお薬をご用意いたしますので」

「ありがとうございます」

夏希さんが作ってくれたお粥を全部食べてから、薬を飲んで布団に入った。…さっきまでずっと寝てたから今はもう眠くはないけど。

「悠斗ー、これアルバム？ 見ていい？」

「別にいいよ…」

許可を出すと、四人がアルバムを囲むように集まって見始める。僕もずいぶんアルバムを見ていないな。

「うわぁー、この頃の悠斗ちいさいー」

「ホントですね。小学校くらいの写真ですかー」

「かわいい……」

「悠斗、小学校ってあたしより背が低くなかった？」

「あ、ホントだ。この写真が証拠写真だ」

みんな笑いながら僕のアルバムを眺めていた、僕はボーっとしながら布団に入る。みんなに風邪うつしたら悪いな、マスクをしておこう。

「あれ？ 中から何か出てきたけど……。ネックレス？」

「…あ。それはダメ……」

僕は思わず大声で叫んだ。みんなびっくりして黙ってしまったので僕は思わず「ごめん……」と謝る。

「もしかして、昔の彼女とのやつ？」

「…なんでルイスが僕の昔の彼女のこと知ってるの？」

「あ……」

「もしかして、みんな知ってるの？ 翼が話した？」

「「「「……」」」」

みんなが無言でうなずいた。なんでだ？ 翼にはみんなには言わないように言っておいたのに…。

「どうゆうこと、翼？ 説明してほしいんだけど」

「…こいつらなら話してもいいって思ったんだ。こいつらなら悠斗を支えてくれるって…」

「でも！ そんな話したなら、もう僕はダメじゃん。そんな自分勝手なこと言ってわかってくれるはずないじゃん！ あはは、また僕は一人になるのか…」

「落ち着け、誰もお前のことを一人になんて…」

「そうよ、みんな悠斗を一人になんてしなから…」

「…出てって」

「何？」

「出って。今は一人にして」

「……」

みんなが黙って出て行く。僕は布団の中でずっとうずくまっていた。最後の一人が出て行って扉が閉じる音を聞いてから僕は泣いた。誰

も、こんな自分勝手な奴には一緒にいてくれはしないんだ。……僕はまた一人なんだ。

「うわああああ……ああああああ！」

いつまでも泣き続けた。泣いてもどうしようもないとわかっていても泣かずにはいらなかった。いつしか僕は泣き疲れて寝てしまった。

「…はあ」

僕は学校を無断欠席して三日が経った。この前、みんなにあんな態度をしてしまつて合わせる顔がなかったからだ。それに、…僕はもう一人なのだ。

「今日も休もう…」

学校に行く気もしないので、部屋ですつとボーっとしているかほとんど寝ていた。誰とも話したくなかったと電源を落とした携帯にはメールと着信履歴が溜まっていた。

「翼、ルイス、翼、彩音、七海さん、ルイス、夏希さん……」

もう僕には構わないでほしかった。ただ、惨めなだけだった。もう…死んでしまつてもいいと思った。どうせ悲しむ人なんていない、何十億という人口が一人減るだけだ。それに、父さんと母さんの元に行けるかもしれない。気付けば鞆からカッターを取り出していた。

「なんかもう疲れちゃったな……」

僕は無意識に右手でカッターを握り、カチカチと刃を出して左の手の首にかざした。カッターを握る右手が震えているのは多分…怖いからだ。でも、これで父さんと母さんに会えると思うと少し怖くなくなる。

「父さん、母さん、ごめんなさい・・・」

「…っ！ バカ！」

目をつぶってざっくり切ろうとした瞬間、突然ルイスが怒鳴って僕からカッターを奪った。ルイスが手に持っていたビニール袋が床に落ちる。

「何回もノックしたのに返事もしないからどうしたんだろうと思って勝手に入ったけど…、何してるのよ！」

ルイスは僕を睨みながら怒鳴った。

「…僕はもう疲れたんだ。別にいいでしょ…」

「いいわけないでしょ！ 何考えてるのよ！ だいたいこんなことしたら…」

「僕は死ぬだろうね。でも、それだけだよ」

「…この…」

パン！ と音が部屋に響く。一瞬何が起こったかわからなかったが、僕はルイスに頬を叩かれたと気付く。ルイスは僕の襟元を掴んで僕に怒鳴りつける。

「あなたは佐倉が自殺しようとした時に佐倉に「そんなこととして、両親が喜ぶと思ってるのか！？」本当にそれでいいと思ってるのか！？」って言ったのよね！ あれは嘘だったの！？ 悠斗こそ、そんなこととして…本当にそれでいいと思ってるの！？」

「……あれは」

「絶対に許さないからね！ そんなことしたら！」

「僕は一人なんだよ。だから…」

「いつまでそんなこと言ってるのよ！ クラスのみんながあなたを心配してるのよ。今まで休んだことがなかったあなたが無断で欠席してるって」

「みんなが……」

クラスのみんなが心配している？ 別に僕がいなくても先生は来て授業が始まって、終わったらお家に帰って、その中に僕がいてもいなくても変わらない。だったら心配なんてされない…。

「はい、これ！」

ルイスが突然携帯を僕に押し付ける。画面を見ると通話中で、ルイスを見ると「早く出る」と言っているので僕は携帯に耳を当てて話す。

「…もしもし」

『バカーーーー！！！！！！！！！！』

「彩音…」

『バカ悠斗！ あんた自殺しようとしたんだって！？ そんなことしたら承知しないわよ！』

「……」

『もしもし、悠斗？』

「翼…」

『久しぶりだな、この大バカ野郎』

「うるさいよ…」

『いつまでも一人だと思いながら引きこもってないで学校に来いよ。みんな心配してんぞ』

「なんで…」

『はあ、このクラスでお前を心配してない奴はいないよ。なあ！みんな！』

翼の声にみんなが「わー！」「と声を上げるのが聞こえる。『おい、いつまで無断欠席してんだ！ 先生がパニくってるぞ。 そうだよ、悠斗くん早く学校来ないと勉強遅れちゃうよ？ 都住が来てくれな

いと誰が宿題見せてくれるんだ!』と順番にみんなの声が聞こえる。

「…いいクラスだね」

「ぐすつ、最高のクラスだよ。ルイス、ごめん…」

「ダメ、許さない」

「え!?　じゃあどうすれば…」

「これから学校に行ってみんなの前で謝ったら許す!」

「…わかった」

僕は制服に着替えてルイスと部屋を出る。久しぶりに出た外は太陽が眩しかった。

そして、僕は教室に入るなりみんなの前で謝罪をした。彩音は僕を一発ぶん殴って「二度とこんなことすんな!」と涙目で言い、みんなは笑って許してくれた。先生にもいろいろ説明して反省文を書くことでなんとか許された。

七海さんも話を聞きつけて教室に来ていた。僕はいつの間にかひとりではなかった。また失うのが怖くて気付かないふりをしていただけだった。

最終話（前書き）

とうとう最終話です。長かったなあ…。

最終話

「悠斗ー、帰るよー」

「今行くー、ちょっと待って」

僕が無断欠席をして学校をサボっていた日から二か月が経った。今は毎日休まずに学校に来てるし、宿題もちゃんと毎日だしている。

変わったことといえば、あれから僕はクラス委員長をしている。もとと他の人がやっていたが先生が「無断欠席したから罰だ」という理由で無理やり変えられた。

あと……

「ほら、料理教えてくれるんでしょ！」

「夏希さんでも教えてくれるでしょう。夏希さんの方が教え方がうまいと思うんだけどなー」

「佐倉は今日は休みなの！ それに…私は悠斗に教えてもらいたいの…」

「…わかった。じゃあ行こうか」

「うん！」

僕はルイスと付き合い始めた。僕から改めて告白した時、ルイスは

嬉しさのあまり泣いて、僕は抱きしめた。

ルイスと付き合っているのはクラスの全員が知っている。彩音や七海さんは「諦めないから!」とだけ言って怒っていたが、なんのことだかわからなかった。

「悠斗」

「何?」

「キスして」

「ど、どうしたの突然!？」

「だってしてくれないんだもん。ずっと待ってるのに」

そつえばあの時、「待ってるから」って言ってたな。……ずいぶん待たせてしまったけど。

「…目、つぶって」

「ん」

僕はルイスにキスをする。もう、失うのが怖いからと気づかないふりをするのは止めた。僕はもう一人じゃないんだ。

最終話（後書き）

今まで読んでくださった方々、本当にありがとうございました！

正直、文章めちゃくちゃで酷かったかもしれませんが、最後までお付き合いいただき、嬉しく思います！

また、別の作品を作るかもしれませんが、その時もお付き合いいただけたらな、と思います！

最後に、ありがとうございました！

夏休みの話 1 (前書き)

本編とは関係ありません。個人的にもっと書きたかったので書きました。

夏休みの話 1

これは僕の夏休みの話。

僕は夏休みになるべくバイトを入れて過ごそうと思っていた。しかし、夏休み期間の短期のバイトは見つからず、今やっているバイトを多めに入れてもらうことになった。

それでも、週に4日あるだけだ。店長にもっと入れてもらえるように頼んでみたものの「お前は働きすぎだ」と言われてしまった。

つまり、1ヶ月程ある夏休みのほとんどは休みである。宿題も大量に出ているが、夏休みが始まって一週間で終わらせてしまった。

暇だなー、と思っていたところに携帯に着信があったので出てみると七海さんの文字が画面に表示されていたので僕は電話に出た。

「もしもし?」

「もしもし、先輩? 今、時間大丈夫ですか?」

「うん、大丈夫だよ」

「来週の土日に卓球部の合宿があるんです。先輩は参加できないですか?」

「来週の土日? えーっと、バイトが入っていないから大丈夫だけど…、僕が行っていいの?」

「もちろんです！　むしろ参加しなかったら部員の半分以上の人が悲しみます！」

「半分以上も！？」

「そうです。ですので忘れずに参加してください。来週の土曜、朝9時に体育館集合ですからね！」

「わ、わかりました…」

「あと、泊りですので着替えとか持ってきてくださいね」

「了解」

じゃ、と言って僕は電話を切った。来週の土日か、家でばーっとしてるより卓球をしているほうがずっといい。僕は七海さんの誘いに感謝しつつ、合宿の準備を始めた。

そして、あっという間に土日がやってくる。僕は大きめのボストン鞆を持って学校へ向かった。

体育館前にはすでに数人集まっていた。その中から七海さんを見つけると彼女と目が合い、七海さんが駆け寄ってくる。

「都住先輩、おはようございます！」

「七海さん、おはよう」

「よかったです。早速、体育館のカギを借りに行きましょう。あ、

荷物はこっちに置いてください」

「うん、わかった」

カギを借りに行くのは本来部長とかなのだが、まだ来ていないらしいので僕と七海さんで借りに行くことに。

「おはようございます。西山先生、いますか？」

「お、都住か。来てたのか？」

「はい、呼ばれたので今回の合宿に参加することにしました」

「そうかそうか、じゃあ今回の合宿はお前に任せる」

「は？」

「いやー、先生も仕事が貯まってな。たまに顔出すから、基本はお前に任せる」

「いやいやいや、そんなのダメに決まってるじゃないですか!？」

「わかりました! みんなに伝えておきます!」

「ちょっと七海さん!? 勝手に決めないで!？」

「練習はいつもどおりでいいから。1時間置きに試合をやること」

「わかりました。じゃあ行きましょう、先輩」

「……わかりました」

しぶしぶ了解して職員室を出る。相変わらず先生は自分勝手だ、それは夏休みだろうと関係ないらしい。

「みなさん！ 今回の合宿は都住先輩が先生代理になるので都住先輩が指導してくれます！」

「……はい！ よろしくお願いします！」

「ははは…、よろしく」

こうして合宿が始まった。1時間自主トレーニングをして試合を挟む。基本的にこの繰り返し、自主トレーニングの時に僕が見に行つて軽く指導をする。

「よし、午前はこれで終了。1時からまた練習を始めるから各自お昼と休憩を取ること」

「……はい」

ここでお昼。午前は指導ばかりであまり自分で練習はできなかった。…結局、先生は見に来なかった。一体何してるんだらう？

「先輩！ 一緒にお昼行きましょう」

「いいよ。コンビニでしょ？」

「はい。夕食は先輩が作るんですよ」

「ええ！？ そんな話聞いてないんだけど…」

「残念ながら我が部の女子たちは料理が破滅的にできないんですよ。…私も」

「そ、そつか。なら僕がやるよ。でも、味は保証できないよ？」

「先輩の作った料理をおいしくない、なんて言う奴がいたらぶっ飛ばします。というか、そんなことありえないですよ。先輩の料理は本当においしいんですから。私が保証します」

「ありがとう。じゃあ、頑張ってみるよ」

「はい。お願いしますね」

七海さんとしやべりながらコンビニを目指して歩いて行く。それにしても、夕食か…。あまり人に食べてもらったことがないからちょっと不安だな。でも、後輩にここまで期待されたら頑張るしかない。コンビニで適当に弁当を買って体育館へ戻る。男子はさっさと食べて遊んでいる。女子はみんなで集まってお昼にしていた。

「あ、七海ー、先輩ー、こっちこっち！」

「今行くー。先輩も行きましょう」

言われるがままについて行ったことを後悔した。そこには女子しかなくて男子は僕だけだった。完全にアウエーである。

七海さんは周りの子たちと楽しそうにおしゃべりしている。僕は端

っ
こで大人しくしているしかなかった。

夏休みの話 2

ものすごく肩身の狭いところでのお昼は落ちつかなかった。何といつても、周りは女子だけ。なんとなく会話に入りづらい…。

「…い！ …んぱい！ …先輩！」

「え？」

「聞いてますか？ 大丈夫ですか？」

「ああ、うん。ちょっとぼーっとしてた」

いつの間にかぼーっとしていたらしく、七海さん達が呼んでいるのに気がつかなかった。みんな心配そうにこちらを見ていた。

「まったく…。夏休みが終わったらすぐ文化祭ですよ。先輩のクラスは何にするか決まってるんですか？」

「ああ、文化祭ね。確か、メイド& amp ;執事喫茶だったかな？」

「ええ！？ もちろん先輩はメイドですか！？」

「いやいやいや！？ そんなわけないからね！？」

「だったらみんなで行きますよ。ね？」

「…ね…」

「ね、じゃないよ。大体、僕は調理のほうに行くから殆ど接客はしないよ」

「つまり、先輩の手料理が食べられるんですか!？」

「…まあ、大体は僕がやるらしいけど」

「だったら行きますよ。オー」

「「「オー」」」

「…チームワーク抜群だね。そろそろ、お昼の休憩時間も終わるよ。午後もしっかり練習するんだからね」

「わかってますよ!」

お昼の休憩が終わって再び練習を再開する。といっても、午前と内容はあまり変わらないのでだんだんとみんな飽きてきてしまう。

「みんな、明らかにやる気がなくなってきたね…」

「合宿なんだからちよつとイベント的なのが欲しいですね! 次の試合で勝ち進んだ人は「都住先輩から頭をなでなでもらえる」権利をもらえるってのはどうですか?」

「いやいやいや、そんなのでやる気出す人いないよ!」

「「「きゃー!」」」

「ええ!?! 何でそんなやる気出すの!?!」

「さて、面白くなってきましたね」

ほとんどの女子がやる気を出して練習をしはじめた。いやー、やる気を出してくれたのはいいけど…そんなものでいいのか？

そして、試合を始める時間になったのでみんなを集めて試合をするように話す。

「あー、負けた…」

明らかに午前中と違うテンションで女子が試合をしている。本気で悔しがっている人もいる。

「モテモテですね、先輩」

「…だったら代わる？」

「俺が代わりに出ても相手にされないですよ」

試合が終わった後輩と適当に話しながら女子の試合を眺める。あ、七海さんが勝ち進んでいる。そのまま優勝していた。

「やったー！ 勝ちましたよー！ せんぱーい！」

「さて、10分休憩しようか！」

「ちょっと先輩！ なでなでしてくださいよ！」

「わかったよ…」

僕は七海さんの頭に手を乗せて頭をなでなでする。七海さんはうつむいていて顔はよく見えないけど、ずっと黙っていた。これ、いつまでやればいいんだ？

「ええっと、もういいかな？」

「はふう……」

七海さんの顔はリンゴのように真っ赤になっていた。おまけに目をとろろんとさせていた。そんなに気持ちよかったのだろうか？

「それじゃあ、この後もしつかりと練習すること！」

「……はい！」「……」

こうして、僕たち卓球部は夕方までみっちり練習をしていた。西山先生が顔を出すことは結局なかった。

「じゃあ、今日はここまで。ラケットの手入れは各自しっかりとしておくこと」

「……はい」「……」

今日の練習が終わって、今は軽くモップをかけたりと掃除をしている。

「さーで、先輩！ 夕食の準備しますよ！」

「材料とかは用意してあるの？」

「もちろんです。家庭科室の使用許可もいただいています。今日はカレーでお願いします！」

「カレーか……。わかった」

「みんなー！　これから家庭科室で都住先輩が夕食作ってくれるよー！　見たい人は見に来てねー」

「わざわざ宣言しなくても!？」

まあまあ行きましよう、と言いながら体育館から出て行く。僕も七海さんについて家庭科室へ向かうことにする。

夏休みの話 3

僕は夕食のカレーを作るために家庭科室にいた。周りにはほとんどの卓球部員が集まってそれを見に来ていた。

「はい、先輩。エプロンです」

「あ、うん。ありがとう」

何気なく渡された白いエプロンをなんの抵抗もなくそのまま身につける。

「…先輩、エプロン姿に違和感がないですね」

「そうかな？」

「普通は嫌がつて身につけないと思ってたのに…。あ、手伝うことあつたら手伝いますね」

「ありがと。じゃあ、玉ねぎの皮剥いてくれるかな？僕はじゃがいもの皮剥くから」

「はい！あ、先輩、ピーラーならこっちに…って早っ！？」

「ん？ああ、ピーラーなら使わなくても大丈夫だから」

そう言つて、僕は包丁でじゃがいもの皮を剥いてゆく。これくらいは当り前のようにできる。1個剥き終わると周りがざわめき始める。

「ね、ねえ、都住先輩めっちゃ手際いいね」「私、じゃがいもすらまともに剥けない気がするんだけど……」「すごい……」

ざわざわするのをお構いなしに、僕はほとんどじゃがいもを剥いて行く。続けて、人参も剥き始める。

もちろん人参も皮を剥くときは包丁だった。1個1個剥いてゆくたびに周りが手品でも見たように驚いていた。

「あの、先輩、私が手伝っても邪魔にしかならないと思うので存分にやってください」

「了解」

僕はてきぱきとカレーを作ってゆく。周りの驚いた顔とかはもう慣れた。

30分経過……

「うん、できた」

カレーが完成した。さすがに40人分を作るのは大変だった。

「あ、じゃあ男子達呼んできますね」

そう言つて1年の女子が2、3人で廊下に出てゆく。残った女子は盛りつけとか片づけとかを手伝ってくれた。

「女の子なのにこんなことぐらいしかできないとは……」「先輩には絶対に勝てない気がする……」「最強ですね……」

女子が落ち込んだように見えるのは気のせいだろう。

遊んでいた男子も集まって全員で夕食にする。…いつの間にか先生も混ざっていた。

「よし、それじゃあ、作ってくれた都住に感謝しつついただきます」

「……いただきます」「……」

そういえば、翼とか彩音とかには食べてもらったことはあったけどそれ以外は初めてだな。みんなの口に合えばいいんだけど…。

「……う、うまい！」「……」

「ほっ、よかった」

思わずホッとした。そして、うまいと言ってもらえたので少し嬉しかった。

「まだおかわりはあるけど、早いもの勝ちだからね」

「ホントにおいしいですよ、先輩」

七海さんが隣の席に寄ってくる。すでに二杯めのカレーに取り掛かっていた。

「口に合って良かったよ。みんなに喜んでもらえたから作った甲斐があった」

「それにしても、先輩は完璧ですね。一家に一台欲しいくらいです」

「そんな家電みたいに言われても…」

「だって、家事は完璧。勉強も出来て、卓球も出来て…言うことないじゃないですか!」

「そんなことないよ。スポーツは卓球くらいしかできないし。完璧ってわけじゃないさ」

「それでも、この中の女子の誰よりも女の子ですよ。先輩、生まれてくる性別を間違えたんじゃないですか?」

「何気にひどいことを言われた気がする…」

「あ、あの都住先輩!」

大きな声で呼ばれたので振り返ると一年の女子が三人いた。いつも仲良しの三人だったはず。黒髪でちょっと背の高い子が一歩踏み出す。

「はい?」

「都住先輩、料理を教えてください!」

「はい!?」

「私たち全然料理ができなくて…。今日の都住先輩見てたら憧れたので…ぜひ、教えてください!」

「「お願いします！」」

女の子三人が同時にビシッと頭を下げる。突然の事に僕は少し戸惑ってしまつ。

「えーっと、僕も人に教えるほど出来るわけじゃないんだけど…」

「だったら、基礎だけでもいいのでお願いします！」

「うーん」

三人とも真剣な表情でこちらを見ていた。…正直、僕もそこまで時間があるわけじゃない。けどまあ…。

「じゃあ、基礎くらいだけでいいなら」

「本当ですか!？」

「うん。自信ないけどね」

「「「ありがとうございます！」」「」」

「それじゃあ、空いてる時間作るからできたら教えるから」

「はい！　お願いします！」

ありがとうございましたー、と言って三人は満足そうな顔をして教室を出て行く。それにしても僕が料理を教えるのか…。

「もちろん、私も参加しますよ！」

「え、七海さんも!？」

「もちろんですよ！ こうなったら卓球部女子全員でやりましょうよ。どうせみんなできないんだし」

「いやいやいや、みんなは無理でしょ！ 教えきれないよ」

「それもそうですね…。じゃあ、さっきの三人と私と私の友達一人の五人でいいですか？」

「まあ、五人なら大丈夫かな。七海さんの友達って？」

「ん、優衣ですよ。私とダブルス組んでる」

「ああ、中武優衣なかたけゆいさんか」

「楽しみですね！」

「すごいはいでるね。明日もその調子で合宿頑張ろうか」

「もちろん！ 明日も頭をなでなでしてもらえる権利を勝ち取りますよ！」

「またそれやるんだ!？」

こうして、七海さんと楽しく話しながら卓球部合宿の長い一日目は終了した。

夏休みの話 4

合宿二日目も充実して終わった。

僕は変わらず後輩たちを指導しながら自分でも練習をしていた。

結局、朝食と昼食も僕が作った。でも、そのたびにみんなが「おいしい！」と言ってくれたのでとても嬉しかった。

先生は最後のほうでチラツと顔を出しただけだった。最後まで自分勝手な先生だな、と思った。

合宿が終われば、僕にはバイトが待っていた。つまり、残りの夏休みはほとんどバイトかな。忙しい日々になりそうだ。

「で、なんで僕はここにいるんでしょうか？」

「それは、これから都住先輩による料理教室が始まるからです！」

僕は学校の家庭科室にいた。教室には僕のほかに七海さんと中武さんと一年の仲良し三人組が…あれ、一人足りない。

「もう一人の子は？」

「えっと、綾奈^{あやな}は今日は用事があったみたいでこれませんでした」

「そっか。それにしても、何も合宿終わって次の日にやらなくても…」

「だって、都住先輩これからバイトばつかで暇ないじゃないですか！」

「まあ、私たちはいつでも構わなかったですから」

背の高い黒髪の今しゃべっている子が、ひのふゆ日野隼さん。後ろでしゃべらずにただコクコクと頷いてるのが須崎加奈さん。すさきかな須崎さんは話したりするのは苦手なのかもしれない。

「家庭科室の使用許可は取ってありますから問題ないです！」

「よく許可取れたね……」

「西山先生に言ったらあつさり許可くれました。条件として作った料理を持つてくこと！　だそうです」

「ちゃっかりしてるなあ、先生は」

「そんなことより始めましょうか！　作るものはカレーです！」

「え、カレーはこの前作ったから別のほうがいいんじゃない？」

「西山先生がこの前のカレーをもう1回食べたいそうです」

「先生の注文！？」

「じゃあ、始めましょう」

先生はそんなにあのカレーが気に入ったのだろうか？　机の上にはすでにカレーの材料がずらりと並べられていた。しかし、量が多い

気がする。

「これ何人分あるの？」

「ん、失敗前提だから多めにしています。先輩は先生用で作って
もらって、私たちは別で作りますから」

「そっか。わかった」

「じゃあ、とりあえず…はい、エプロンです」

「あ、どうも」

僕は手渡されたエプロンを何の抵抗もなく身につける。他の4人も
すでにエプロンを着けていた。

「はい！先輩！まず、何すればいいんですか？」

「いきなり！？えーっと、まず野菜を洗って皮を剥こう」

「わかりました。じゃあ、私と優衣はこっちでやるから、雫と加奈
はそっちでお願い」

「わかった」

こうして、4人の料理教室が始まった。中武さんや須崎さんは家の
手伝いで料理をたまにするらしく、普通に問題はなかった。ただ、
七海さんと日野さんは…。

「？先輩、玉ねぎってどこまで剥けばいいでしょうか？」

「え！？　ちょ、七海さんそれは剥きすぎ！」

「都住先輩、じゃがいもの皮が剥きづらい」

「日野さん、じゃがいもがバラバラになってるから！」

この2人は家の手伝いもまともにしたことがなく、料理は全然やったことがなかったらしい。思わず、投げ出してしまいそうになった。まあ、しょうがないと思うことにした。

「じゃあ、次は野菜を炒めます。フライパンに油をひいて、温まったら玉ねぎから炒めて」

「わかりました。…そろそろいいかな。とりゃー」

「え！？　ちょっと、いきなりそんなに入れたら」

「熱っちーーーー！　油飛んだーーーー！」

「やっぱり…。危ないからゆっくり入れてね」

「せ、先輩、指、火傷…」

「はいはい、こっちで冷やそうね」

僕は蛇口を捻って水を出し、七海さんの手を取って水で冷やした。そこまでひどくないから少し安心した。

「…先輩は彼女ができたとしたらやっぱ料理ができたほうがいいで

すか？」

「？ そりゃあ全くできないよりは少しはできたほうがいいと思うけど…。どうしたの突然？」

「いえ、やっぱり先輩は生まれてくる性別を間違えてるなーと思って」

「そろそろ怒るよ、七海さん」

「きゃー、先輩に怒られるー」

パタパタと走りながら中武さんの後ろに隠れる七海さん。別にそんなに怒ってるわけじゃないけど、先輩としての威厳が…。

「都住先輩は、先輩っていうより仲のいい友達って感じですよ。いい意味で」

「どうゆう意味！？」

「親しみやすくてことですよ。ね、優衣」

中武さんも頷いている。もしかして、と思って日野さん達のほうも顔を向けると、2人とも「うんうん」と頷いていた。そっかー、仲のいい友達って感じなのか。

「都住先輩、そろそろいい煮込む頃合いじゃないでしょうか？」

「ああ、そうだね。それじゃあ、水を入れた鍋に入れて煮込もう」

炒めていた野菜を鍋に入れてコトコトと煮込む。先生用のカレーはもう出来あがっていて、弱火でじっくりと煮込んでいた。隣から中武さんが覗き込んでくる。

「それにしても、都住先輩は教えるのが上手いですね。さすがです」

「いやいや、中武さんも包丁の使い方がとっても上手かったよ。僕が教えるまでもないくらいだった」

「そんなことないですよ。あの、また機会があつたら別の料理も教えてもらっていいですか？」

「うん、僕でよかつたらいいよ。次はもうちょっと難しいのでもできそうだね」

「そうですね…、ハンバーグとかがいいです」

「ハンバーグか…、うん、じゃあ次やる時はハンバーグね」

「はい！　ありがとうございます！」

中武さんはしっかりとお辞儀をして、洗い物をしている日野さんのほうへ手伝いに行った。僕はカレーが焦げ付かないようにお玉でかき混ぜていた。

「できた！」

たっぷり煮込んでカレーが完成した。早速、お皿にご飯とカレーを盛り付ける。そして、5人でテーブルにつき、手を合わせた。

「…………いただきます」「…………」

スプーンで一口取り、5人で一齐に口に運ぶ。

「……………うまい！」「…………」

とても始めて作ったとは思えないくらいおいしいカレーができた。
4人とも満足そうにカレーを食べている。

「やっぱり都住先輩の指導がよかったですねー。とってもおいしいですよ」

「でも、料理はやっぱり難しいよね」

「今回は都住先輩がいたからできたけど、一人でやるのは無理かもしれない」

「まあまあ、また機会があったら教えてるから。少しずつ慣れていけばいいと思うよ」

全くやらないよりは少しずつやったほうがいいだろう。料理の1つや2つ覚えておいて損は無いはずだ。

「とりあえず、今日はこれで終わりですね。先輩、ありがとうございました」

「ううん、今日は僕も楽しかったよ」

「……都住先輩、ありがとうございました」「……」

「どういたしまして」

こうして料理教室は終了した。西山先生にカレーを持っていったら、鍋ごと持って帰ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6342h/>

僕の過去とみんなの未来と

2011年3月4日23時04分発行